俺が理想の主人公 -魔術と科学編-

ふぉんふぉん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺が理想の主人公　－魔術と科学編－

【Ｎコード】
Ｎ９２４７Ｚ

【作者名】
ふぉんふぉん

【あらすじ】
　他人を庇ってテンプレ的に死んでしまった主人公が、テンプレ的に神っぽいやつに会って、テンプレ的に転生、憑依、などするお話。
　転成、憑依するにあたって主人公は力をもらった。
　そしてもらった力とともに様々な世界を生きていく物語。
　自己解釈、ご都合主義などの要素があります。

※当作品はその第一世界です。

プロローグ

「やっとここまで来たか。いや～長かった、ホントーに長かった。はぁ…」

その少年はそんな言葉とともに溜め息を吐いた。
溜め息はいままでの苦労を語るかのように深く、重いものであった。

「でも、ようやく始まるんだよな。」

そのように独り言をつぶやく少年がいるのは「学園都市」と呼ばれる場所である。
「学園都市」とは人口東京西部に位置し、東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る完全な円形の都市。
総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約２３０万人。
そしてその8割は学生によって構成されている。
外周は高さ5ｍ・厚さ3ｍの壁に囲まれ、完全に外部と隔離されている。
そしてここの学園都市において学生たちが行っているのは、能力開発である。

「ここでどんなふうにやっていこうかな。並行世界というからにはあいつに言われたとおりに違いはあるんだろうけど…まあ、そんなことは今はいいか。」

少年からつぶやかれた「並行世界」という単語が、この少年が普通でないことを物語っている。

「それにあいつもいってたしな、楽しんで欲しいって…」

あいつというのもどこか遠い所にいる人物というよりは、もっと別の何かを感じさせるような口ぶりであった。

「…まあ、こんなことごちゃごちゃ考えてたら楽しめるものも楽しめないよな。やっぱ自分が思うままに過ごさないとな…。」

そうつぶやくと少年は学園都市の町を歩き始めた。

その表情にはこれからへ期待のためか、満面の笑みであった。

この少年、旧名、日野井（ひのい）　慶（けい）は新しい道を進み出した。

これからの未来に胸踊らせながら…上条当麻として。

プロローグ（後書き）

初めまして、ふぉんふぉんと申します。
いままでは作品を見る側だったのですが、今回、自分の作品を投稿させていただきました。こんな駄文でも楽しんでいただけたら幸いです。

さて、今回はプロローグということで結構短めにいたしました。
ですがこれはこの作品の導入ということで主人公がこのようになったあらすじを次回、プロローグ2という形で投稿したいとをもいます。
このあとの続くもなるべく早く投稿いたしますので今後とも宜しくお願いします。

プロローグ2

ｓｉｄｅ：当麻（慶）

やあ皆さんどうも。わたくしは旧名、日野井（日野井）　慶（けい）こと現在は上条当麻と申します。

自分この世界に来てから１５年、ようやく学園都市に来ることができたわけです。

これまでのことを思い返してみると、いろいろ苦労したな～と思います。

なにがあったかと言いますと右手が原因で発生する不幸の数々。

同年代のやつからはいじめのような物を受け、その親たちからも軽蔑の視線を受け、その他にも数えきれないほどの嫌がらせを…という具合に本当にろくなことがなかった。

だかそれもここに来たことで無くなる。なぜならこの学園都市は異常（アブノーマル）こそ普通（ノーマル）だからだ。

アブノーマル万歳！！！最高？？……

……調子こいてすんませんでした。

さて、そんなことはとりあえず一旦　ＳＯ・ＧＥ・ＢＵ　しておいきましょう。

ところで、画面の前の皆様にはなぜわたくしが上条当麻になっているか説明してませんでした。

サーセン。

というわけでここで一度、回想をした方がいいんじゃなかろうかと思います。

え？そんなのめんどくさい？プロローグ二回もやってんじゃねーって？

ハッ、いいぜ、お前らが回想も見ずに本編を読もうってゆーなら、

まずは、その幻想をぶち殺す！！！！！

はい、つーわけで回想です…

…

…

…

「…あれ、ここどこだ?」

俺が気がつくとそこはどうにも見覚えのない場所だった。
周りを見渡しても白一色。上下前後左右、すべてが真っ白。

というか、こんなとこに見覚えのあるやつなんかいないんじゃないかとすら考えてしまうほどだ。

「でもなんでこんなとこにいるんだ?」

それが疑問だった。
だからここで自分の最後の記憶をおもいかえしてみると…

…?そうだった!俺は確か工事現場の近くを歩いていて、そしたら突然上からガシャン?という大きな物音とともに鉄骨の雨が降ってきたんだ!

でもそれは俺に当たる軌道じゃなくて俺の前方にいる女性に当たりそうだったんだ。

そして、危ない?って思った時にはもう体が動いていた。

俺は女性を突き飛ばし、代わりに自分が鉄骨の下敷きになった…
はず？

でも俺には意識があるし助かったのか？

仮に助かったとしたらここは…

「…病院、なのか？」

いやそんな分けないと思い直す。

普通に考えて鉄骨に下敷きにされて生きてる訳がない。ほぼ確実にだ。

だがそれだと自分に意識がある説明がつかない。それじゃあ何だ？と思っていると…

「お主はあのまま死んでたよ」

声が聞こえた。

それと同時に、ああ、このパターンはもしかして、とも思った。

声が聞こえた方向に振り返ると、俺の予想を肯定するかのようにいかにも神って感じの爺さんと女神って感じの美人がいた。

「あんた、神ってやつか？」

「うむ、因みに名前はゼウスという」

「ふぅん、んじゃあその神様がこの場所に俺を連れてきたんだろ

？俺に何のようだ？」

「お主にはな、転生をしてもらおうとおもってな。」

やっぱりこうなるか。

というか死んで、訳のわからないところにいて、神っぽいやつに会ったら転生だよな。

テンプレだなテンプレ。

「でも何で俺なんだ？他にも人間なんかいろいろいるだろ？」

「それについてはな、お主はあの時に近くに居たやつを庇って死んだじゃろ？
んでそやつがたまたまいろいろと調査のために下界に行っていた神だったのじゃよ。
神じゃったら別に鉄骨に下敷きになる程度じゃ死にゃせんのじゃが、そのままじゃとちと不憫に思っての、転生させてやろうということになったのじゃよ。」

ってことは俺はあれか、無・駄・死・にってやつか？
うわ～ないわ～ｏｒｚ

「あ、あの…」

俺が思わずｏｒｚになっていると声がかけられる。
そちらの方を地に手をついたままに見上げると神と一緒にいた女神っぽい人だった。
というかよく見てみると何処となく俺が庇った神ってやつに似て

なくもない気が…

「あの、私の不注意のせいであなたを死なせてしまってすいませんでした！」

どうやら本人だったらしい。

「…まあ、しょうがないですよ。起こってしまったことはもうどうしようもないですし気にしなくていいですよ。」

「えと…怒ってないんですか？」

「別に怒ってないですよ。
それに女性を庇って死ぬなんておれにとってある意味に本望みたいなもんですから。
だからそんな悲しそうな顔しないでください。
あんたは美人なんだから笑ってた方がいいですよ。（ニコ」

そして言葉とともに頭を優しく撫でてやる

「っっ！／／／はいっ／／／あ、私の名前はアテネっていきます／／」

俺の言ったことに満面の笑みとともに返事を返してくれたアテネ。
たださっきと違い顔を赤らめているのはなんでだ？

「…これがニコポ、ナデポ、鈍感、天然というやつか…」

「なんか言ったか？神さん」

「いや、なにも」

神がなんか言ったような気がしたが小さくて聞き取れなかった。

なんだったんだ？

「さて、では話もついたようじゃしそろそろ本題に入るとするかの。お主が転生するのは漫画やアニメの世界となるのじゃがあくまで平行世界じゃ。なにかイレギュラーな事態が起こるやもしれん。そこでこちらからもそれに対抗するための力なんかを授けよう。お主に授けるのは、まあ、仮に名前を付けるとしたら『あらゆる事を極める程度の能力』じゃな。これは主に強化と可能性に満ちた能力でな、思考錯誤する事によってアニメなんかの技も使えるようになったりもできる。あとこの能力により限界がなくなり極め続ける事も可能じゃ。」

わーい、それなんてチート？

ぶっちゃけ強すぎね？もうこれで十分だろ。

…でもどうせだったら俺がもらいたかった物がもらえたらよかったな。

俺だっていままで生きて来てこういう展開を夢見た事なんていくらでもある。

だから自分の考えた力をもらいたかった。

「んーそうか、なら一つだけお主の考えたものを現実としてやろう。」

「あれ？こころ読まれた？いやそれよりも現実にしてやろうって、マジで！よっしゃー？神テラ太っ腹！」

いやーめちゃくちゃ嬉すぃーです！
とするとどの能力にしようかな～迷っちゃうけど…よし、アレにしよう。

「俺が望むのは名前を付けるなら
『理想の主人公設定で転生する程度の能力』だ。
まあ、説明すると転生、憑依するに当たって理想の設定を着ける事ができる。
例えば、ど○えもんののび○くんに転生するとしよう。の○太くんがバカなのはみんなの知ってるとおりだろう。
そこでこの能力の出番だ、もし俺がの○太くんが天才だったら?と考えた設定があるとしよう。
そして俺がこの能力をもっての○太くんに転生したら、考えたとおりに天才になっているというわけだ。」

はいチートです自重はしません
サーセン。

「あいわかった。それじゃ能力を付加しよう。ぶるぁぁぁあ?」

とそんな若本的な掛け声とともに俺の中で何かが変わったような気がした。

テテテテーン!
というなんかＬｖが上がったようなＢＧＭとともに『慶は能力を手に入れた』というのが頭に浮かんだ。
当然スルーである。

「これで能力は与えたぞ。では早速平行世界へ送ｒ「あ!ちょっとまって?」…なんじゃ?」

「行く前にあんたからもらった能力でどの程度のできるか試したいのと研究がしたいんだけど、問題ない？
向こうに送られてからだと試す機会がなかなかなさそうだし、何より見つかったらややこしい事になりそうだから…」

「…それもそうじゃな。そういう事ならわかった。それじゃあアテネ、めんどうを見てやってくれ。私は戻る。お主も次の世界、楽しんでくれ。」

「はい！よろこんで！よろしくお願いしますね、慶さん。」

「ああ、よろしく。」

…
…
…
…回想終了！
いや～長い回想だった。
まあ、そんな経緯があって今の俺があるわけなんですよ。
そしてアテネとても良くめんどうを見てくれた。
ホントに2人には感謝感謝だ。

ただ、アテネがこちらを頬を赤らめてなにも考えてなさそうな目で度々見てくるから、なんなんだ？とは思ったけど。

まあそれはおいといて、研究を終えてコッチに来た時は本当に苦

労したよ。
　自我のある俺に対して母乳とかオムツとかマジで恥辱以外の何ものでもなかったよホントに。
そしてだんだん慣れていく自分が怖かった。
　人間の適応能力とは恐ろしいものだ。

まあ、そんなわけで上条当麻に転生してからようやく１５年、やっと学園都市デビューを果たしましたわけです。

　これから厄介事に巻き込まれる訳だが、
ＡＬＬ　ＨＡＰＰＹ　ＥＮＤ？

　これを目標に日野井　慶、改め上条当麻はそげぶしまくる！

　さて、まずはトキワに生息するＬｅｖｅｌ５の電気ネズミをゲットしにいこうかな？

そんなわけで、じゃあな

プロローグ2（後書き）

プロローグ2少し遅くなってしまいました。すいません。
今回は書く事が多くてやや適当になってしまったかもしれません。

さて、次回は主人公設定かな？と思っております。
次回もよろしくお願いします。

主人公設定（前書き）

一月一日に修正

主人公設定

転生前

名前：日野井（ひのい）　慶（けい）

趣味：漫画、ラノベ、ゲーム、料理、格闘技など

好きなもの：趣味と同じ

嫌いなもの：歪んだ感情を持つやつ、卑怯の度が過ぎるやつ、人として明らかに間違ったことをするやつ

性格：普段はある程度冷静で、時々熱血さが混じってくる感じ。
周りの雰囲気に合わせられる柔軟さもある。
その時のテンションによっても変わってくる。

能力：『あらゆる事を極める程度の能力』
あらゆる事に対する適性を持つ事ができ、試行錯誤する事によりあらゆる事ができるようになる。
また、あらゆる事を強化でき、強化効率も上がり上限もなくなる。
常時発動で、無意識に習得、強化している場合もあり。

『理想の主人公設定で転生する程度の能力』
転生時のみ有効な能力。
簡単に言い換えると転生時にあらゆる設定を付加する能力。または、設定に変化する能力。

※能力名は仮です

備考：身長１８０ｃｍ、体重７０キロ、服の上からなら触れば明らかにわかるほど筋肉がついている。細マッチョ？
容姿は目が多少切れ長で前髪が若干片目にかかっている。長さは肩にかからないくらい。
イメージとしては、ＦＦの某片翼の天使を柔らかくした感じ。
イケメンでニコポ、ナデポ、天然、鈍感を習得済み。
転生前もこのせいでいろいろあった。
さらに能力によってより拍車が掛かる。
服装は通っていた学校の制服で、制服のブレザーの下にフード付きパーカーを着ていた。
　口調がその時の雰囲気や機嫌なんかによって変わる節がある。
真面目な時、ふざけてる時、普通の時
などの主に三つで変わる

真面目なのは戦闘時や重要な事を話す時やシリアスな場面などに多くで、やや鋭い感じの言葉使いになる

ふざけてるのは親しい奴らなんかと話してる時やネタを挟む時に多く、軽い感じの言葉使いになる

転生後

名前：上条当麻

趣味：同じ、不幸？

好きなもの：同じ

嫌いなもの：同じ

性格：やや上条当麻に引っぱられているところはあるが、基本的には同じ
引っぱられたことにより気だるげな雰囲気が少し出てる

能力：『あらゆる事を極める程度の能力』

『現実殺し（リアルブレイカー）』
　左手に宿る力
自然に発生する力を消し去る。
例えば、地面に触れて地面の硬度を消し去れば（０にすれば）硬度が無くなる。
だが、対象が大きすぎる場合に有効範囲がある。
主に触った部分から直径２ｍ。
消し去る対象は任意選択。
だが自分に危害が加わりそうな時は例外的に力が発動する。

『幻想殺し（イマジンブレイカー）』の対。
力に段階があり。

『幻想殺し（イマジンブレイカー）』
原作の力とほぼ同じ。
『現実殺し（リアルブレイカー）』の対。
力に段階あり。

備考：身長１７５ｃｍ、体重６７キロ
筋肉的には転成前と同じ
　容姿は上条当麻を主体に転生前の容姿が混じった感じ。７：３ぐ

らいの比率。
　不幸スキルも合わさって、よりフラグが立つようになった。
普段の服装は原作の上条当麻と同じ様に学ランだったり、ワイシャツです。

主人公は主に幻想殺しと現実殺しを使います。　能力で習得した魔術も使いますがあまり使う事はありません。
ですが明らかに魔術というのをあまり戦闘では使わないのであって、物を創るだとか魔術かどうか判別しずらいものは頻繁に使うかも。
　あと、日常生活においても使います。

口調も転生前の様にその時その時で変わってきます。

主人公は能力による適性によって習得によって氣や魔力が使えます。
強化の能力によってあり得ないほどのスペックになっています。
でもそれらはリミッターを掛けて抑えています。
リミッターはミサンガみたいなアクセサリーになっていて手首に二つ付けている。

一つの効力はその世界において人間離れしないぐらいまで身体能力や魔力、氣を落とす。

もう一つは魔法や、氣の操作などによりできることを制限すること。

それらを付けるのは純粋にその世界を楽しみたいと思ってるためです。

主人公設定（後書き）

次回から一話に入ります。

主人公が使える魔術については使い始めたらまた説明しようと思います。

高校入学。だから俺は寝る

ここは学園都市。

総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約230万人。そしてその8割は学生によって構成されている。

そしてこの学園都市において学生たちが行っているのは、能力開発である。

学園都市というからには、やはり学校の数の凄まじいものであり、上位の学校から下位の学校まで腐るほど建っている。

ここで話は変わるが今の季節は春、しかも桜も咲いている4月の前半である。

学年が上がるものもいれば卒業して、新しい学校で勉強するものなど様々な者がいるだろう。

そして今日は春休み明けの日である。街中には新しい制服を着て、これからの学校生活に期待を持つ者、緊張してやや硬くなってる者、不安を持つ者と、進学したであろう者の表情からはそんな感情が読み取れる。

つまり今日はどこの学校でも入学式が行われるのだ。

そしてここはその学園都市の学校の内の一つ。別に名門校というわけではなくどちらかといえばその逆に位置する高校だ。

そしてここにはある一人の学生が通っている。いや、正確にはこれから通い始めるのだが…。

その学生の名前は上条当麻。そう、我らが主人公である。

もちろん当麻が通っている学校でも当然のこと入学式が行なわれている。

今も新入生たちが体育館に集まり入学式を行っている最中であり、それを証明するかのようにこの学校の校長であろう禿げた人物が長々と挨拶をしている。

その長ったらしい挨拶に飽きてきたのか、体を　かくん　と揺らしながらも寝ずまいと必死に目を必死に開いている生徒もいる。

そんな中、当麻はというと…

「……ＺＺＺ…」

…下を向いて思いっきり寝ているのであった。

ｓｉｄｅ：当麻

いやーよく寝た。清々しいくらいの快眠だった。夜に普通に寝るよりもよく眠れたのでは？と思えるほど気持ちよ～く夢の世界に旅立てた。

というのもあの校長の声が、中年太りのハゲ親父に似合わないかわいらしい感じ眠気をさそう声だったのが原因だな。いい感じに子守唄になっていた。

俺だって最初のうちは真面目にやろうと思ってたんだ。

…ホントダヨ？

でも聞き始めて３０秒もしない内に眠気が来て、５０秒もするともうどうでも良くなっていて、１分もすると睡魔という強敵に意識をあっさり落とされていた。

だから仕様がなかったんだと言い訳させてくれ。

まあ睡魔の話はここで終わりにするとしよう。

さて、俺が眠っている間に入学式も終わり今は各クラスでホールルームの時間となっている。

だが俺たちの担任になるであろう人物が入ってきた時俺より前の席にいる青い髪のやつが「うほーーー！」だとかうるさいのなんの。

因みに担任の名前は月読　小萌だった。

あの合法ロリのお方です。
平行世界と言ってもここは変わりが無いらしい。

それから、自己紹介をしてある程度説明を受けたあと解散となった。

俺も帰ろうかな?と思った時に俺のところにある2人が話しかけて来た。

「なぁなぁ、君入学式で思いっきり居眠りしとったやろ?」

「そうそう、普通は最初くらい自重するもんじゃないかにゃー?」

そう言って話しかけて来たのは青髪にピアスを付けた担任の登場に騒いでた男と、金髪にサングラスとアロハシャツを装備している男、
そう、変態の青髪ピアスとシスコンの土御門　元春だった。
あ、自己紹介したのに青髪ピアスの本名聞き忘れた。でももういいか。

「…自重しろってゆーならお前らのその髪とピアスとグラサンとアロハシャツはなんなんだよ。それこそ自重しろよ。」

「あー、それを言われたら…」

「返す言葉もないにゃー。」

「まあそんなことはいいや。こうやって話すのも何かの縁だ。ホームルームでもやったけど改めて自己紹介するよ。
俺は上条当麻。呼び方は好きにしてくれ。」

「それじゃあ上やんって呼ぶ事にするわ。ボクの事は青髪ピアスって呼んでな。」

「土御門　元春。こっちも上やんって呼ぶことにするにゃー。」

「ああ、よろしく。」

「そうや、これからその辺一緒に回らへん？親睦の意味も込めて…」

「こっちは別に暇だからいいぜい。」

「俺も暇だからいいぞ。んじゃ早速いきますか。」

そうして一緒に教室を出てそのまま校外も出て行く。

回ってる途中、青髪が幼女を相手に喜々として話かけようとしていた。そしてそれに便乗する土御門のバカ2人を抉りこむように放った右で沈めて止めた。

路上で高校生が2人も沈められるのはやたらと目についたらしく、2人の足を持ってその場から引きずって早々に立ち去った。

ガリガリジョリジョリいっていたが気にしない。

2人を引きずったあとに、金と青の糸のようなものが大量に散らばっていたがそれでも気にしない。

その後目覚めた2人と共にまたその辺を回ってある程度いい時間帯になったので解散した。

学校初日はなかなか有意義だったと思う。

高校入学。だから俺は寝る（後書き）

やっと一話目を投稿できました。
遅くなってすいません。
次回は2話です。

主人公設定を少し弄りました。

あと、気がついていらっしゃるとは思いますが補足説明としましてプロローグで「あいつ」という表現が多々ありますが、「あいつ」というのは神（ゼウス）のことです。
念のため説明させていただきます。

俺は説教される側じゃない！（前書き）

1月1日に修正しました。

入学式が行われた次の日。
新しく一年生になるにあたっての最初の大きなイベントを終えた事により、新入生たちは多少の緊張が抜けたことだろう。

今日学校で行われたのは、委員会やクラス係り決め、身体測定などである。
だが今はそれも終わって一段落し、昼休みの時間となっていた。

教室内では前の学校からの知り合いどうしだったり、はたまた新しく知り合った者たちどうしだったり、それぞれが思い思いに会話している。

そしてそれは当麻に至っても例外ではない。
昨日の入学式後に知り合った青髪ピアスと土御門　元春と共にオタク談義に花を咲かせていた。

そんな特殊な会話をしている三人の元に、一人の女子生徒が割り込んで来た。

ｓｉｄｅ：当麻

「…というわけでボクが思うに女の子で一番魅力的なのは小萌先生みたいなロリ系であるということを…！」

「あまいぜ青髪！魅力的という事ならメイドの妹！さらにそれが義妹だったらというのが一番ぜよ！」

「お前ら性癖が特殊すぎるだろ！やっぱり日本人なら長い黒髪がだなぁ…！」

どうも、上条　当麻だ。

悪いが今の俺はとても忙しい。なぜならこの重傷末期患者２人に黒髪の女性の良さを伝えなければならないからだ。

え？お前も十分きてるって？

？　なんのこっちゃ？

は？　今度は何？少しは自重しろって？

…お前、ここにいる俺たちの３人にそんなもん求めてどうすんだ？

俺たちは自重なんて鎖からとっくの昔に開放された自由人（ニート）なんだよ。

俺は今この会話に存在価値を見出しているんだ。時間取らせんな！

「なんや２人とも？別にボクは２人の趣味を否定する気はないんやけど、ロリ一番説を否定するのはいただけへんな～…」

「そっちこそ、義妹メイドの良さが一番ていうのを理解できないとは、ヤル気なのかにゃ～？」

「はっ！いいぜ、お前たちが異常（アブノーマル）しか認めねーっつーなら、まずはその現実をぶち殺す？」

「ちょっと？そこのバカ3人？」

俺たちが己の主張の正しさを証明するための　聖戦（茶番）を始めようと構えるが、怒鳴り声によって横やりを入れられて萎えてしまった。

俺たちは声の主の方へと向く。

そこには長い黒髪で整った顔立ちをしていてからだの前で腕を組んだポーズで立っている女生徒が居た。

その女生徒俺も思ったことだが、多分隣の2人も思ったことだろう。

「…なぁ2人とも、どんな女の子が一番魅力的かって話題だったけど、俺やっぱり変えてもいいか？」

「奇遇だな上やん、義妹メイドも最高だか、この時ばかりは変えたくなってきたところだぜい。」

「なんやツッチーもか？実はボクもそう思ってたところや。」

「…やっぱり女の子で一番魅力を感じるって言ったら…」

「巨乳だな！」「巨乳やな！」「巨乳だにゃー！」

「貴様らいい加減にしろ？」

「「「ぐはっ！！？」」」

直後凄まじい威力のゲンコツをもらった。

……

……

……

「…あの、まずあなたはどちら様でしょうか？」

あ、ありままに今起こった事を話すぜ。
この女生徒にパンチをもらったと思ったら3人揃って正座させられていた。
な…なにを言ってるのかわからねーと思うが俺もなにをされたのかよくわからねー…。
瞬間移動（テレポート）だとか時間操作とかじゃない…

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

「貴様は自分のクラスのやつの事もわかんないの？あたしは吹寄。吹寄（ふきよせ）　制理（せいり）よ。」

はい、皆さんなんとなく感づいていたとは思いますが、吹寄さんです。

別に俺、分からなかった訳じゃないです。会話を交わすのは初めてだったから一応名前を聞いといた方がいいかな～と思っただけです。

吹寄は原作でもあんまり登場してなかったから俺もあんまり性格を把握しきれてないところがあった。

実際に会ってみて思った事はだ、さっきもいったかもしれないが吹寄はホントにスタイルがいい。このクラスの女子たちと比べてもその差は歴然だ。

スタイルも良くて顔もいい。なのになんで吹寄から色気が1ミリも感じ取れないんだろうか？

美人に罵倒されるのが好きそうな青髪ですらなにも感じてなさそうだ。全く持って不思議である。

でも今そんなことはどうでもいいか。

問題はどうしてこんなことになってるかだ。

「では吹寄さんや、なんで俺たちはこんな状況になってんでしょうか？」

俺の言葉を肯定するようにで同じように正座している2人も「うんうん」と言いながら頷いてくれる。

「そんなのは貴様らが大声であんな変態トークしてるからに決まってるじゃない。」

「変態とは何や！ボクらは1人の紳士として「あぁん？」ヒィィ？すいません？」

物凄い迫力だったな。

直接睨まれた訳でもないのに脚がガクブルしてるぜ。正座してるけどね。

土御門も俺と同じ様な事になってた。

「だいたいなんなの？その青い髪にピアスだったり金髪、サングラス、アロハシャツの三点セットは。あと上条当麻、貴様は入学式の時に寝てたわよね？少しは場をわきまえという事をぶつぶつぶつぶつ……」

殴られたと思ったらなんで今度は説教されてんだ？

というか普通そのポジションは俺のものだろうが…

「…なぁ上やん、この状況どうにかしてくれニャー…（ヒソヒソ）」

「はぁ？何で俺なんだよ…（ヒソヒソ）」

「そりゃあ上やん、自分黒髪ロングが好みって言ってたからやないか…（ヒソヒソ）」

「そうだにゃ～。それに今なら巨乳属性に風紀種も付いてきてお得だぜい…（ヒソヒソ）」

「別に俺はお前らと違ってそこまで執着してねーよ。さらにいまこの時にばかりは風紀種なんて欲しいとは思わねーよ。仮に上条さんの好みだったとしても、説教くさかったり手が出てくる女性はちょっと苦手何ですけど…（ヒソヒソ）」

「ぶつぶつぶつぶつ…ってさっきから貴様らはさっきから何コソコソしてる？」

「い、いえ！何もありまへんよ？」

「そ、そうにゃ～！何にもないにゃ～？」

「そ、そうですよ！別にあなたが少し説教臭いだなんて言ってま…あっ…」

「なっ？」

「ちょ？」

「……へぇ～…そう…」

失言した。

吹寄から口から声が聞こえた時には俺の体は教室のドアに向かってもう動き出していた。

人はものすごく熱い物を触った時、身を守るため先に手が引っ込みそれから熱かったと感じるものだ。

そのような現象を総じて反射というのだが、俺の体はまさにその反射によって行動していた。

頭の中にけたたましいほどの警報音が鳴り響いたのは、廊下に出

た後だった。

２人も少し遅れながらも俺の後に続いて走り出した。

「逃がすかーーー！」

「上やん！なんてことしてくれんねん？」

「上やんのあほーー？」

ああ、なんていうかもうこれはあれを言うしかないよな…

学園都市に入ってから一度も言ってなかったけど、どうやら上条当麻という人間はこの言葉と共に一生を過ごすらしい…

大変長らくお待たせしました。

それでは皆さん、ご唱和ください！

せーの

「不幸だーーーーーーーーーー？？」

…　…　…　…　…

その後、俺たちと吹寄の追いかけっこ（デスマーチ）は昼休み明けのチャイムが鳴るまで続けられた。

結果を言えば俺たちは何とか生き残る事ができた。

ある程度まで抑えあるが、能力で強化されていた俺をギリギリまで追い詰めるなんて恐ろしいやつだ。

あれか？怒りのせいで我を忘れて人間の限界でも超えたか？

でもまあ、何はともあれこれで明日の太陽を見る事ができる。

閑話休題

その後は放課後まで何もなく終わった。

今日は用事があり青髪や土御門たちと一緒に帰らず解散することに。

用事というのはまあ、買い出しだ。

この学校の近くのスーパーで夕市があるらしい。俺はそこで半額の卵を手に入れなければならない。

貧乏学生である俺にとってはどうしても見逃せない。

そうして急いで靴を履き替え学校を出た俺は早足のままスーパーへと向かう。

だがその途中なにやら大声で言い争いをしているだろうことがわ

かるものが聞こえた。
なるべく早くスーパーに向かいたかったのではあるが、どうにも気になって仕方がない。

携帯を使って時間を確認してみて、まだ少し余裕があることが分かる。
そう考えると言い争いが聞こえた方へと向き直りやや駆け足で行く。

現場と思わしき場所に着くとそこにあったのは、髪を金に染めたり耳にピアスつけたものだったりと、誰が見ても不良と答えるであろう男たちが5人。
そしてそのうちの1人によって羽交い締めにされ襲われかけている女生徒が1人という光景だった。

こんなものを見ちまったらもうスーパーがどーのこーのなんて言ってられない。

俺はその集団に向かって歩いて行った。

俺は説教される側じゃない！（後書き）

次回に続きの話をします。
まだしばらくインなんとかさんは来ません。

あと主人公設定で説明不足が結構あると思いました。
近いうちに変えようと思います。

あと、セリフで　その現実をブチ殺す　というのがありますが、左手に現実殺しを持っているため間違いという訳ではありません。

むしろこっちで行こうかな?とも思っております。または合わせるかもしれません。

鉄の女でも結局は女の子（前書き）

新年あけましておめでとうございます
元旦に投稿出来ませんでしたので、いま挨拶させていただきます。

鉄の女でも結局は女の子

ｓｉｄｅ当麻

「お前ら、５人でよってたかって女の子１人に何してる。」

俺はその集団にに聞こえるだろうところまで近づき言った。

こいつらは自分たちの事に忙しかったのだろう、俺が近づいているのに気づかないで声をかけた時ようやく気づいた。

不良達は部外者であるおれに対して「何だこいつ？」って感じの疑問顔になっている。

だが女生徒の方からは驚愕って感じのものが読み取れる…ってこいつ、遠目からじゃ不良たちと重なっててよく見えなかったが…

「あ、あんた…上条当麻！」

「吹寄？（なんであの吹寄が？）」

そう、吹寄だった。

ていうか吹寄ならこいつらに一発入れて逃げるくらいできそうだと、昼休みの吹寄の印象が強いのでそう思ってしまう。

…ってかよく不良の方を見たら顔にもらったのを象徴するように頬が赤く若干腫れているやつが居た。

「お前何？部外者はあっち行けよ。」

「女を助けてヒーロー気取りですか～？」

「それとも、あれか…俺たちにボコボコにされたいマゾなのかな？」

そんなことを言った後、不良たちは「へへへっ」と薄気味悪い笑いをする。

「別にマゾでもヒーローのつもないが？それに部外者だろうがこんなの見て見過ごせるわけないだろ。」

「な？あんたこの人数相手にやりあおうってゆーの？無理よ？」

「そうそう、この嬢ちゃんの言うとおりだぜ。」

「俺たちは今お楽しみ中なんだよ。ボコボコにされたくなかったらさっさと帰んな。」

「だからさっきも言っただろ？見過ごせるわないって…まあ確かに、この人数差だと無謀な様に見えなくもないけどな、ボコボコにされるのが俺とは限らねーぞっ！」

語尾を強めて力を込めると共に踏み込む。

不良達は吹寄を中心に囲む様に立っていたが、俺はまず一番近くに居たやつまでの距離を一気に詰める。

そしてその勢いままに頬を殴る。殴られた不良は不良達の間を吹っ飛び３ｍくらい転がって停止した。

ぴくりとも動かなことから気絶したのだろう。

他の奴らには俺がダッシュする姿勢が見えたと思ったらもう殴るところだったという風に見えてたと思う。そのぐらいの踏み込

みをしたからな。というより今のは縮地の技術に近いな。
そしてそれを証明するかの様に周りの奴らは「は？」と驚きを露わにしている。

驚愕して固まってる間に殴った不良の右側にいたやつに、殴った勢いを利用して、右脚を軸に左の回し蹴りを脇腹に決める。
殴られた不良同様、そいつも勢い良く吹っ飛び少し転がった後に停止した。気絶はしておらず、寝転がったまま呻いている。

そして今度は左側に居たやつに掴みかかり、柔道の背負い投げをで地面に叩きつける。
不良は「がはっ？」と息を吐いて悶絶している。

柔道や合気道の達人が技を決めると、やられた方は何をされたかわからないうちに転ばされているという。
俺は転生前、色々な格闘技について調べたりそれを試したりするのが好きだった。いわゆるバトルマニアなのか？
そしてもらった能力なんかでより技術を強化してその領域にたどり着くことができた。というよりさらにその先までいっている。オリジナルの技術も開発してる。

つまりこの不良は俺が向かって来たと思ったらいきなり視界か回って地面に叩きつけられていたと感じてるはずだ。

3人を倒した俺は吹寄を羽交い締めにしていない、吹寄に手を出そうとしていた不良を見る。
だが流石に驚きからの硬直が解けたのか、こちらに殴りかかってきた。
俺はその拳を側面叩いて逸らす。不良は前のめりにバランスが崩れ、その体の胴に向かってアッパー気味に殴る。

カウンターとなったそれを食らった不良は腹を抑え、崩れ落ちる様に倒れる。

残り1人となった不良の方へと向き直る。

だがそこでその不良は…

「う、動くんじゃねーっ?こいつがどうなってもいいのか?」

「「っ?」」

…ポケットからナイフを取り出し吹寄の顔に突きつけやがった。

襲おうとした挙句に自分がやられそうになったら人質にする?

…

…

…

…

フザケンナヨ…?

side out

side吹寄

昼休みの時の3人組を思い出す。入学したばかりだったから見過ごそうかとはおもっていたけど、教室であんな会話を大声でさ

れていると気になってしまうのは仕方がないと思うわ。

そのバカな会話をしている3人もやっぱりバカなやつらだったわ。

あたしはその3人の中でツンツン髪のやつが特に気に入らなかった。

それはそいつから発せられていた気だるげな感じが、何かにつけて手を抜いてそうな雰囲気が原因ね。

突然だけど話を放課後に変えるわ。

帰りのホームルームが終わった直後、あたしは帰りの支度を手早く済ませて、早々に帰った。

何か用事があるということでもなかったけど、強いていうなら…気分ね。

それに今考えて見ると…入学したてのあたしにとって、まだクラスに親しい友達なんていなかったから残ってもあまり話すことも無かったしね…

そうして帰路に立ったのだけどその途中でナンパにあった。

ナンパしてきたやつらはいかにも不良って感じだったから相手にしないでそのまま無視した。

しかし相手もしつこく言い寄ってきた。でもあたしは無視し続けたわ。

それに不良達は腹が立ったのか「おい！」っていう怒声と共に強引に手を引っ張られた。

もちろんあたしも抵抗したわ。不良の1人を殴るという形で…

でもそれに不良達が完全に切れ、あたしが殴ったやつとは別

の不良に取り押さえられてしまった。

「離しなさいよ？」

「そう言われてはい、わかりましたって離すわけねーだろ。」

「それにしても、とんだ暴力女だ！そんなお前には調教が必要だな！」

不良達がそう言ってニヤニヤ笑い出すといやらしい手つきで、あたしの胸に手を伸ばしてきた。

悔しかった。あたしにできる抵抗といえばこいつらを罵倒するぐらい…本当に悔しかった。

「お前ら、５人でよってたかって女の子１人に何してる。」

そんな時、声が聞こえた。

きっとこの状況を見兼ねて助けようとしてくれたんだと思うけど…でもその声はすごく最近聞いたことある声だったわ…

そして確認して驚いた。

「あ、あんた…上条当麻！」

「吹寄？」

その声の主は、あのバカ３人組の１人の上条当麻だったわ。

上条は「なんで吹寄が？」って疑問が読み取れるわね…。

あたしだってなんであんたがこんな所に…って思ったわ。

ただ、気になる事があるのだけど…

「（こいつ、ホントにあの時と同一人物？）」

今のこいつからは昼休みのような気だるさや、ちょっとふざけてる雰囲気が欠片も感じられない…むしろその真逆の真面目で冷静な印象しか伝わってこない。

同一人物か疑うのも無理ないと思うわ…

そんな事を考えてる間に不良達と上条とでやり取りがあったらしく、あいつは…

「別にマゾでもヒーローのつもないが？それに部外者だろうがこんなの見て見過ごせるわけないだろ。」

…って言った。

さっきの割り込んだ時の言葉からもあたしを助けようとしてくれるみたいだけど、あたしを抑えてる奴を抜きにしてもまだ一対四…それを目の当たりしてもまだ助けようとしていることに、流石に驚いたわ。

最も、上条がこの人数差をものともしない能力があるとするなら話は別だけど、あんな普通の学校に通ってる時点でそんなものがあるとは思えなかった。

だからあたしは驚いたって感じの言葉と共に言ったわ、「無理よ」って…。

それを肯定する様に不良達も何か言うけど、それでもあい

つは顔色一つ変えたり、考えるそぶりも無い。

「（なんでそんなに自信たっぷりなの？こいつは…）」

でもその疑問は次のあいつの行動で解けたわ…

「だからさっきも言っただろ？見過ごせるわないって…まあ確かに、この人数差だと無謀な様に見えなくもないけどな、ボコボコにされるのが俺とは限らねーぞっ！」

…そう言って踏み込む姿勢を取ったと思ったら、いつの間にか近づいていて1人の不良を殴った後だった。

「「「「「「は？」」」」」」

あたしを含めて不良達からもそんな事が漏れた…

でも上条はあたし達が惚けてる間も止まらずに次々と不良を倒していき、あっという間に不良はあたしを取り押さえてるだけになった。

「……凄い…」

「なっ、なんなんだこいつ？」

上条が次々と倒していく様子に、あたしは自然とつぶやいていたわ…

でも1人になった奴はそうも言ってられないみたいね…まあそうよね。だって次は自分の番なんだから。

でも、次の展開はあたしには予想外だった…

「う、動くんじゃねーっ？こいつがどうなってもいいのか？」

「っ？」

「っ？（ナ、ナイフ？）」

不良はやけになったのかナイフをあたしに突き付けてきた。
これにはあたしも流石に怖かったわ。
だってただのナンパが自分の命の危機になったのだから…当然よね…

もしかしたら死んでしまうかも…そんな悲しい気持ちになっていたら突然その場の気温が下がった気がした。

「（か…かみ…じょう？）」

その原因はすぐにわかった。目の前にいる上条がもの凄い怒気と共に憤怒の形相でこちらを、正確にはあたしの後ろの不良を睨んでいたからだ。

「テメェ、ふざけんじゃねーぞ？？？？」

「っ？」「ヒッ？」

上条が突然、空気がビリビリとする程の怒鳴り声を挙げた。
それに対し不良はビクッとなって短い悲鳴を挙げた。それも仕方ない事だと思うわ。あたしも声が出そうになったから…

不良が怯んで硬直したのを上条は見逃さなかった。一気に近づいて不良のナイフを持ってるほうの腕を掴む。
その腕を引っ張りあたしと不良引き離すとその腕を掴んだまま柔道の一本背負いで不良を地面に叩きつけた。
「ガァッ?」と声を挙げた不良の上に馬乗りになる。痛みからか、不良はその時にはナイフから手を離していみたい。

「なんであんな事なってたのは何となく分かる!大方ナンパに失敗たからその腹いせ何だろ?だがな、そこで助けに入った俺にやられそうになったからって自分の都合で人質とっていいわけねーだろーが?しかもナイフまで持ち出して!お前達は吹寄に相手にされなかった時点で諦めなきゃいけなかったんだよ?でもな、お前みたいな腐った奴には言葉だけじゃわかんねーだろうからな、痛い目にあってもらう!歯ァ食いしばれ?」

上条はそう言って不良の顔面に拳を叩き込んだ。
不良は鼻から血を流して動かなくなった…気絶したみたいね。

「(……終わっ…た…)」

あたしは終わったことで緊張から解け、地面にへたり込んでしまう。今回ばかりはホントに怖かったもの…

上条は気絶した不良から離れてあたしの方にやって来た。
目の前まで止まってあたしに手を差し出して…

「もう大丈夫だ。怪我は無いか？立てるか？」

怒った時の憤怒の表情と違い、優しげな声で微笑みながら掛けられた言葉に、

本当に安心できた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　当麻

その後、あの吹寄が突然泣目になったから相当焦った。完全にオロオロしてたと思う。

とりあえず抱き寄せて、もう大丈夫だからと言葉を掛けながら頭を撫でてやった。

そしたら嗚咽を漏らしながら泣き始めたから、

余計に悪化させちゃった？と思い離れようとしたんだけど吹寄が両手で俺の制服の胸の所を掴んで離さなかった。

「（え？え？この人本当にあの吹寄さん？別人じゃないよね？）」

考えてみたら、いきなりナイフ突き付けられて殺されそうになったんだからな、いくら吹寄でも女の子だし、相当怖かったんだろうな…だからそのままにしてやった。

それから数分して離されたから、とりあえず場所を移そうと思い電話で風紀委員（ジャッジメント）に通報と事情を説明してそこを離れた。

今考えたら路上で女の人を抱き寄せるとか、変態じゃね？
周りに人がいなくてホント良かった…

近くにあった公園にやって来た。吹寄はベンチに座らせて俺は自動販売機に飲み物を買いに来た。

吹寄の好みがちょっとわかんなかったから、とりあえずお茶を自分の分も含め2つ買ってベンチに戻った。

「吹寄、お前の好みがちょっとわかんなかったからお茶にしたんだけど、これで大丈夫か？」

「だ、大丈夫、問題ないわ。ありがとう。」

そう返事をもらって安心した俺は、吹寄の隣に座る。
お茶の缶の金具を引っ張り、缶を開けて一口飲む。缶を口から離して、「ふぅ」と息を吐く。
吹寄もお茶を飲んで一息した所で話しかける。

「落ち着いたか？」

「え、ええ、恥ずかしい所を見せたな上条。」

どうやら、もう大丈夫そうだな、目元がまだ若干赤いが…ていうか顔全体がなんだか赤いような…
恥ずかしいって言ってたしその通りなんだろうな…

「あれは普通の反応だよ。別に恥ずかしいことなんかじゃない。」

「そう言われるとこっちも少し楽だわ。ありがとう。」

「…」

「…何？どうかした？」

「あ、いやその、吹寄がありがとうなんていうのが以外で…」

「…知り合ったばかりとは言え、貴様がどういう目であたしを見てるかよくわかったわ。」

「へ？あ、いやいや！こ、これは言葉のあやでして、その、えっと…ごめんなさい？」

「…ま、まあいいわ、今回は助けてもらったんだし特別に大目に見るわ。」

「へ？あ、ありがとうございます。」

そこで一旦会話が途切れた。やっぱりあんな事があった後だと話しづらいし、会話もそこまで続きそうもない。

あと、やっぱり吹寄に違和感がある。さっきから何となく話す時なんかどもってるし、今の所だって前なら殴られる所だと思うし…でもやっぱ気のせいなのかもな…

「そういえば吹寄、今回の発端を聞いてなかったんだが、やっぱりナンパだったのか？」

「…ええ、その通りよ。あいつらがナンパして来てそれを無視してたら強引な手段になって…反撃に1発殴ってやったら襲われそうに

なったのよ…。」

「そうか、やっぱりナンパだったか、まあ吹寄は顔も整ってて可愛いしな、それにスタイルもいいしナンパされない方が可笑しいよな…」

「っ？か、かわっ／／／き、貴様はいきなり何を言い出すのよ？／／／」

「え？何がだ？俺は本当にこいつの事を言っただけだぞ？」

「っっっ！！？／／／／／（なんでこいつはこういう歯の浮く様な事がいえるの？）」

「ど、どうした？なんか急に赤くなった様な…まさか熱か？すまん吹寄、ちょっと熱測るぞ？」

そう吹寄に伝えて近づく。吹寄の顔に手を添えてデコとデコをくっ付ける。

なんか吹寄が「な、なななな／／／／」とか言ってる気がする。それと共にどんどん温度が上がってるような気もするんだけど…

「／／／なななななにをするんだ貴様はーっ？／／／／／／」

「ごふっ？」

な、なんで上条さんはいきなりボディーブローを喰らわねばならんのですか？俺はただ良かれと思ってやっただけなのになんでこんな仕打ち？

「ハァ…ハァ…ハァ…／／／／／／／」

「な、何するんですかいきなり?上条さんが何したっていうんですかっ！」

「う、うるさい上条当麻！／／／そんな事はなんでもいいだろう?／／男がいちいち気にするな?／／」

「いやいや！男でも気になる事は気になるんですよ?」

「と、とにかく！／／今日はありがとう、助かったわ。あたしはこれで帰るわ。また明日会いまｓ「あ！ちょっと待った！」今度はなんだ！」

「帰りは1人で大丈夫なのか?」

「はぁ?流石に一日に二回、もナンパになんか会わないわよ。」

「そうかもしれないけど単純に心配だからだよ。あと今回みたいに何か困ったことがあったら言えよ?これもなにかの縁かもしれないし、お前のために時間も作るよからな。」

「っ?／／／ええい貴様というやつは次から次へとなんなのよ！！／／／もういいまた明日な！／／」

そう言って吹寄はダッシュで帰ってしまった。何をそんなに急いでるんだ?

でもまあ、吹寄も帰ってしまった事だし俺も帰るか。

あ、スーパーのこと忘れてた。

鉄の女でも結局は女の子（後書き）

投稿一日空いてしまって申し訳ありません。

今回の2話は吹寄とと絡みなのですが、吹寄の口調が資料が少なくてわからなかったのが原因で遅くなりました。

思いっきり原作捏造です。

そして、一つ前の話しも修正しなければならなかったのでより時間がかかってしまいました。

しかもこれでもまだ妥協点ですのでこれから先、修正する可能性大です。

修正といえば主人公設定を大きく修正しました。

目を通していただけたらと思います。

次回も本編更新します

イメージ的には少し時間を飛ばしてビリビリとの会合をやろうかな？なんて思っております。

ゴールデンウィーク、時々フラグ（前書き）

御坂とのエンカウントの予定でしたが急遽変更しました。そして…

Y?A?T?T?I?M?A?T?T?A

それだけ言っておきます

ゴールデンウィーク、時々フラグ

入学式から早いもので1ヶ月。
桜の面影などもう残っておらずもう緑しか存在しない。

今日は5月の始め、しかもゴールデンウィークである。
世間的にはすべての学校が休みであり、学園都市でも例外はあるだろうが基本的には休みとなっている。

ゴールデンウィークを利用して、固まってきたグループで何処かに出かけるなど、家でゴロゴロ過ごすなど、学生達は大概その様にして過ごしている筈だ。

ここは第7学区のとあるアパート、その一室に住んでいる者がいる。
そう…上条当麻だ。

当麻はこのゴールデンウイークを家で過ごすため布団に包まり、コンクリートの塀に張り付くカタツムリの様にベッドに張り付いていた。

そんな時、一本の電話がかかって来た…

ｓｉｄｅ当麻

♪巫女巫女〇ース！巫女巫女ナー〇！生麦生米巫女〇〇ナース！…♪

「…なんだ?人が折角気持ち良く寝てる時に…それにこの着信音は青髪か?」

ゴールデンウィークを迎えた今日この頃、俺は自宅で惰眠を貪るためにベッドに寝ていた。

吹寄のナンパ騒動から早いもので一ヶ月が経った。あの時から俺と吹寄の仲はそれなりに良くなった。

朝に挨拶したり、たまに昼飯を一緒に食べたり、稀に一緒に帰ったり、その様なことをする様になっていた。

でも、吹寄がその時顔を赤らめていたのは何だったのだろうか?風か?

そして、そんな俺たちを見て青髪と土御門がうるさいのなんの…俺たちをからかって怒った吹寄に沈められていた。怒っていたからなんだろうな…顔が真っ赤だった

因みにからかった後の会話を再現すると…

「カミやん、吹寄とは何があったんや?」

「そうだぜい、あれだけ嫌われてたのに、いきなりフラグが立ってるなんておかしいにゃ~!その辺キリキリ吐いてもらうぜい!」

「いや別に何も無いって。あ、でも昨日ナンパされてる所を助けてやったな…でもそれだけだ。それに吹寄に限ってフラグが立つわけないだろ?」

「な?あれだけ分かりやすいのに気づかないなやんて…どうなっとるんや?」

「あり得ないぜい…これからはコレをカミやん病と命名しよう。そしてカミやん…」

「「恐ろしい子?」」

てな感じの会話があったんだがその時の内容は今でもあまり理解出来ていない。全くもって意味が分からん。

まあ過去の話はここまでにしておいて、そろそろ電話に出るとしよう。

ピッ

「もしも~し、なんだ青髪?」

『あ、カミやん?今な、外を適当にぶらぶらしとったらツッチーと会ってな、そのままお邪魔することになったんよ。だからカミやんも来いへん?所でカミやん今どこ居る?』

「…俺は今は家でゴロゴロしてて忙しい。」

『なら暇なんやな?それじゃ行きよるから、準備しとってな?ほなまたあとで。』

「おい、聞いてたか?俺は今忙しいと『プツッ、プーッ、プーッ、プーッ、プーッ…』……」

あの野郎…勝手に切りやがって…

でも、忙しいとか言いつつもぶっちゃけ暇だ…

…行ってみるか
そう思い準備を始める。

「（まあ、土御門の家は隣だし、ゆっくり準備しても間に合うだろう。）」

ていう最初、土御門が隣だったことに驚いちまった。原作知識はあった筈なのに…どうやら細かいことは忘れちまってるらしいな…

そしてある程度の準備を済ませたら、外から話し声が聞こえて来た。どうやら二人がきたようだ。

玄関から顔を出し確認するとやっぱり青髪と土御門だった。

「よう2人とも。」

「カミやん、今呼ぼうと思った所やで。」

「でも、手間が省けて良かったんじゃないかにゃ～。まあ2人とも、今鍵開けるからちょっと待ってくれにゃー。」

土御門はそう言って鍵を開けようとするが、なんか疑問顔になっている…

「どうしたんだ土御門？」

「ん？ああ、なんか鍵が開いてる…」

「は？ま、まさか泥棒かいな…？」

「警備員（アンチスキル）に連絡するか？」

「いや、多分あいつだから大丈夫だぜい。」

あいつ？と思うが土御門は中に入って言ってしまう。
それに続くように俺も入って行くと、中には少女がいた

カチューシャにメイド服を着た少女だった。
その少女は土御門を見てこう言った。

「アニキ、何処行ってたんだー？」

……
……
……

「義妹（いもうと）の土御門舞夏たぞー。いつもアニキがお世話になってる。アニキと被るんで舞夏って呼んでくれて構わないぞー。」

「土御門をお世話してます、この部屋の隣人でもある上条当麻だ。よろしくな。」

「同じく、ツッチーと同じクラスやで。ボクのことは青髪ピアスって呼んでくれや。」

「わかったー。」

「ちょ！2人とも何をいってるんだぜい！お世話された覚えなんか無いにゃー！あと、舞夏も納得するな！」

「所で舞夏がメイド服を着てるのはコスプレなのか？」「おい、カミやんスルーなのかにゃー？」

「まさか、ツッチーの強制やろか…」「青髪までもにゃー？」

「違うぞー、私は繚乱家政女学校に通う正真正銘のメイドさんなんだー。しかもエリートなんだぞー。」「にゃー、俺の愛しの義妹まで…」

俺たちが土御門をスルーしているとｏｒｚ状態になってしまった。舞夏にスルーされたのが相当効いたのか、ズーンっという効果音と共に縦線があるのが見える。

義妹に無視されてここまで落ち込むとか、まったくもってうっとおしい…

「ていうか…ツッチーがメイドで義妹やったら良いとかいつだか言うてたけど、あれ妄言やと思っとったわ。」

「そうだよな～、しかもこんなに可愛いときたもんだ。土御門の義妹にはもったいないな。」

「……アニキ、私って可愛いのかー？」

「ああ舞夏、お前は可愛いぜい。青髪、元が居ないであんな事言ってたら痛い奴じゃ収まり切らないにゃー。そしてカミやん！貴様人ん家の義妹になにフラグ立てようとしてる？あぁん？」

えぇーなんでこいつ、こんなに切れてんの～？

あと俺に立つの不幸フラグだけだと思うんだが……あ、やべぇ

目から汗が垂れる。

「なに急に怒ってんだ?俺はただ思ったことを言っただけだぞ?」

「……ぽっ」

「だーかーらー!そんなこと言うからフラグが立つって言ってるんだにゃー?あと舞夏!頬を赤らめるんじゃないぜい?」

「こ、これがカミやん病の感染力とその威力……恐ろしい…恐ろしいでカミやん…」

全く持って意味が分からん…そんなお前には「日本語でおk」と言ってやりたいが、もっとややこしい事になりそうだからやめといた。

青髪もなんか言ってたが怒鳴られてる俺には聞こえなかった。

あと土御門、お前キャラが変わってるぞ。

そんな風にギャーギャー騒いでいたが、時間が経つとそれも収まっていた。

で、なんだかんだでもう昼飯の時間帯になった。

「舞夏、今日の昼飯は何だにゃー?」

「カレーだけど、私とアニキだけだと思ったからそんなに量ないぞー。」

「え、そうなん?ボクも舞夏ちゃんのカレー食べたいわ。なんたって、本物のメイドさんのカレーやもんなー。」

「俺も食ってみたいな…1人暮らしだと料理するし、出来れば参考にしたい。」

「そう言ってくれるのはありがたいけどー…

「やらん！やらんぜい！このカレーは兄である俺の物にゃー！何人たりとも渡さないにゃー？」

…このバカアニキがうるさいし…」

全くこのシスコンは…ここまで来るともう救いようがねーな。

でも俺にも意地がある、絶対に食べたい。

…あ、そうだ。

「なあ、実は俺も昨日カレーを作ったんだけど…舞夏のカレーと俺が作ったカレーを分けて食べるってのはどうだ？俺も料理が好きで結構自信があるんだけど自分だけじゃよくわからないからな、この機会に他の人に評価してもらいたいんだが…いいか？」

「ボクは全然それでも構わへんよ。」

「私もそれで構わないぞー。エリートメイドである私が評価してしんぜよう。」

「舞夏のカレーは渡さないのにゃー？」

「…カミやん、このシスコンを何とかしとくから、はよ取って来(き)いな。」

「その間に私が準備をしてくぞー。」

そう言う2人に俺は頷いて部屋を出る。
靴を踵を踏んづけたまま適当に履いて玄関を出る。隣である俺の部屋に入りすぐにカレーの鍋を温める。
温め終わったカレーを鍋ごと隣に持って行く。

土御門の部屋に戻るともう配膳されており、４人分のご飯とルーを入れるための皿が２つある。１つにはもうルーが注いであった。

「すっげー美味そうな匂いだなー。」

「せやなー、流石はメイドさんやで。」

「ふふん、そうだろうそうだろう、兄としても鼻が高いにゃー。」

「これでも一応エリートだからなー。それより早くそのカレーを出してくれ。」

おっと、そうだった。
カレーを皿に注ぐために鍋の蓋を取る。部屋に俺の作ったカレーの匂いも充満する。

プレッシャーを感じた。

突然の事になんだ?と思ってるとどうやらその発生原は舞夏であるらしい。目がこれでもかってぐらいに見開らかれていた。

俺が若干気圧されていたら、舞夏がもの凄い速さで動き、気がついたら鍋を掻っ攫われていた。

舞夏はそのままのスピードで皿に均等にカレーを別けると「いただきます？」と言って先に食べ始めてしまった。

「「「…」」」

俺たちは呆然とするしかない。

「…おい土御門、御宅の舞夏さんは一体どうしたんですか？」

「…多分、カミやんのカレーにメイドか料理人魂を刺激されたんじゃないかにゃー？」

「確かに、カミやんのカレーもいい匂いしとるしな～。」

「…まあ、俺たちもいただきますか？」

それに2人も頷いてくれた。

「いただきます」と言って俺たちも舞夏に遅れて食べ始める。

まずは舞夏の作ったカレーから食べる。

「匂いから分かっていたが、本当に美味いな。店に出してもいけるだろこれ…」

「ボクもそう思うわ。こんな美味いもんが頻繁に食べられるなんて、ツッチー羨ましいで…」

「フッハッハッハッ、そうだろう！やはり義妹メイドは最高って事だにゃー！」

「…スルーでいいか？」

「せやな。それよりカミやんのカレーも食べてみようや。」

「ま、俺の義妹のカレーには敵わないだろうがな。」

そう言って2人は俺のカレーで一口食べる。その間も俺は舞夏のカレーを食べる。使われてる物を考えながらしっかり味わう。

とそこで、俺のカレーを食った2人が驚きながら叫んだ

「な、なんだこのカレー？このカレーの美味さは舞夏と同等、いやそれ以上だにゃー？」

「メイドの訓練を受けとる舞夏ちゃんより美味いやなんて、どんな風に料理してんねん？」

「そんなに美味かったか？自分じゃ分からないもんだな…」

そんな風に思っていると、そこまでずっと黙ってガツガツと食べてた舞夏が…

「……負けた」

…先程の土御門のようにｏｒｚ状態になって落ち込んでしまった。しかもなんか涙目だ。

「ってカミやん！舞夏のメイド魂折ってもうて…いや、粉砕してもうてるがな？」

「カミやん！貴様、俺の義妹を泣かしたな？許さないぜい？」

「なんだ？俺が悪いのか？メイドより不味いものを作らなきゃいけなかったのか？」

理不尽だろう！なんでわざわざ不味い物を作らねばならない！

でも、俺が原因らしいしとりあえずは舞夏を慰めなければ…！

「えっと舞夏！なんて言ったらいいのか、えっとー…そ、そう！お前のカレー本当に美味かったよ！俺の周りにはこんなに美味い料理作れる女の子は居なかったから土御門が羨ましいよ！将来いいお嫁さんになれるよ！」

俺は頭を撫でながら言ってやる。俺が土御門に殺される、頼むから泣き止んで～？

と念じていると舞夏が多少持ち直した。

手を床に付いている状態から上目遣いで見上げてくる。

不覚にも可愛いと思ってしまった。

「…本当かー？」

「ああ、本当だ。何なら俺が欲しかったくらいだ。」

「……／／」

あれ？なんか顔が赤くなってるような…

そして後ろから凄まじい殺気を感じた。

「上条当麻、殺す…！」

「え、あの土御門さん？口調が変わってますよ？ほ、ほらいつもみ

たいにカミやんって呼んでくれよっ？」

危なっ！こいつ本気だ！本気で殺しに来てる！スプーンの持つ方を目に向かって投げやがった！

俺はただ舞夏を励ましただけじゃん！

ええいとりあえず今は逃げる！

玄関に向かってダッシュしドアを開ける。靴なんか履いてる時間はない。靴下のままアパートを駆け抜ける。

土御門もどうやらそのまま追いかけて来てるようだ。

ああ、この逃亡（デスゲーム）はいつまで続けなければならないんだろうな…とりあえず言おう

「不幸だーーーー！！！！！」

「待て！上条！」

「カミやんの鈍感もホンマ救いようがないなぁ…」

「…／／」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ土御門

カミやんの鈍感にはほとほと呆れれるぜい。

いつの間にかあの吹寄とフラグが立ってたし？あろう事か俺の義

妹にまでフラグを立てやがったにゃー。

ていうかもう、呆れを通り越してむしろ感心したぜい。

エージェントの俺から言わせてもらえば、あのカミやん病は人心掌握に使えると思った俺は、なかなかに冴えてるんじゃないかにゃー？

でももしそれをしたら、片思いに苦しむ男どもが増えるからやめとくにゃー。

全く、厄介なのは幻想殺しだけでいいってのにその対の現実殺しまであるし、本当にカミやんは恐ろしい男だぜい。

でも今は、このリアル鬼ごっこに全力を注ぐとするかにゃー。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　舞夏

ゴールデンウィークになったしー、私はアニキの所にご飯を作りにいった。けれどアパートにはアニキがいなかったんたぞー。

だからアニキから貰ってたスペアの鍵を使って中に入って待ってたんたぞー。

暫くしてアニキは帰ってきたけどアニキは友達を2人連れて来たんだー。

上条当麻と青髪ピアスって言うらしいなー。

自己紹介を簡単にやって適当に喋ってたらもう昼ご飯になってたんだー。メニューはカレーだったけど、量がそんなになくて困ってたんだー。

そしたら上条当麻が自分が作ったカレーを持って来るって言うから、私は評価してやろうと軽い気持ちでいたんだー。

驚愕した。

料理の指導なんか受けてなんかなさそーなのに、私よりも全然美味かったんだー。

エリートとしてメイド魂を砕かれたねー。

「えっと舞夏！なんて言ったらいいのか、えっとー…そ、そう！お前のカレー本当に美味かったよ！俺の周りにはこんなに美味い料理作れる女の子は居なかったから土御門が羨ましいよ！将来いいお嫁さんになれるよ！」

上条当麻は必死に慰めてくれて、私にも嬉しい事を言ってくれたー。

多少立ち直る事が出来たなー。

「…本当かー？」

「ああ、本当だ。何なら俺が欲しかったくらいだ。」

前のやり取りで上条当麻を少し良いかなーなんて思ってた私にこれは効いたねー。多分、赤面してたなー。

アニキと同じくらいかそれ以上に良いと思ったよー。

お嫁の話があったけど、その前にまずー、上条当麻の味を超えねばなるまいなー。

上条当麻、貴様は私の中の眠れる獅子を目覚めさしてしまったのだよー。

絶対超えてやるから、
これから覚悟しろよー！

ゴールデンウィーク、時々フラグ（後書き）

なんかすんませんでした。
これは正直作ってて投稿しようか悩みました。
私的にはこの作品ではとことんハーレムを目指してるつもりなのですが、

これはいいのか？

と思ってしまった。
余りに不評なら何かしようと思っています。

さて、前回の吹寄と同様、いやそれよりもやっちまった感がやばいです。
一応この小説での土御門舞夏のコンセプトはアニキは好き、しかし当麻が好き、感情表現が原作よりは豊かという感じです。

気に入っていただけたらいいのですが…まあそれは諦めます。

次回こそはビリビリします。
今後もよろしくお願いします。

関わっても面倒なだけ

出会い。

その単語単体から受ける印象は、良いか悪いかで考えたら良い方に属するだろう。　漫画や小説でも、その出会いから新しい恋が…とか、その出会いが私の人生を変えた…とか、いい意味で使われる事が多いからだ。

出会いを良いと感じるのは当然のことでは無いだろうか…

でも必ずしも良いことばかりではない事を忘れてはならない…

入学式から約二ヶ月経って6月。この月にはもう、4月のような清々しい心地よさはない。夏の始めであり梅雨の時期でジメジメとした気持ち悪さすら少し感じる時期だ。

そんな時期に1人少年と1人の少女が出会う。出会いのシチュエーションとしてはなかなかにいい…だが、内容は悪いの一言に尽きる。

そんな二人がこれからどういう関係になって行くのか…それは二人の今後の対応しだいだろう……

ｓｉｄｅ当麻

ゴールデンウィークから一ヶ月と少したった6月の中頃、　もう大分暑くなり衣替えも迎えていた。服装は薄い中着に半袖ワイシャツのみになっている。

そうそう、ゴールデンウイークで土御門と色々もめたが、別に仲は悪くなっていない。むしろ義妹メイド談義をして関係がより良くなったぐらいだ。

なんか青髪が「カミやんがツッチーに侵食された！」とか言ってたが・・・なんのことだ？

話を戻すと俺は今、日が沈み完全下校時刻の過ぎた時間帯を歩いている。

今日の授業を終えて帰ってる途中コンビニが目に入ったのだが、そういえば週刊誌の新刊が今日だったな…と思いだしコンビニで立ち読みをした。

楽しい時は時間が経つのが早いもので、気がついたらもう日が沈んでて、帰りが今になっているというわけだ。

帰り道を歩いている途中、俺より少し年下ぐらいの少女が壁に背を預け、それを取り囲むように8人の不良たちが居るのが見えた。

「（俺はナンパの現場によく出くわす運命らしいな…）」

吹寄の時もそうだったし…

でもまあ、見てしまったからには放っておけないよな…だが、不良は8人…別に全員を一度に相手にしても勝つ自信はあるが、流石にめんどくさい…

これはあれだな、知り合いの振りをしてさりげなく少女を連れ出す作戦だ。

そうと決まれば早速行動、そいつらの所へ行き、不良の間を通りながら少女の元へ歩く。

「お、居たいた。すんません連れがお世話になりました。ダメだろかってにいなくなっ…た…ら…ま、まあ見つかったから良かったけど。じゃ、じゃあ俺達はこれで…」

正直つまずきながらも最後まで言い切った俺を褒めてやりたい。

さて、なぜ俺がこんなにも動揺してしまったかと言うと、それは少女に原因がある。だがなぜ少女に原因があるのか、結論を言ってしまおう…

その少女は…

「誰あんた?」

…御坂美琴だったからだ…

この学園都市に来た頃、初めにビリビリにちょっかい出そうかな?なんて思ったことがある。でもその時は考え直したんだ…

今会ったらこれから先、会うたびに追いかけ回されるんじゃないか?って…それはちょっと嫌だったためやめたんだ。どうせ後でエンカウントすると思ったし…

でもそれが今とは思わなかった。完全に不意を突かれた気分だ。

しかし今はそんなことどーでもいい…俺は驚きで言葉をつまらせながらも言い切ったってのに、それをこいつは「誰あんた?」の一言で切り捨てやがって…作戦台無しじゃねーか!俺の苦労も台無しだっ!

「ちょ、おまっ!空気読めよ?今の流れをどうしてそんなバッサ

リ切り捨ててんだよ！俺の作戦が台無しじゃねーか！」

「なんで私がそんなことしなきゃなんないのよ。それにあんたの作戦なんか知らないわよ。」

「何だテメェ？舐めた真似してんじゃねーぞ。」

「なんか文句でもあんのか？ああん？」

「うるせさいんだよお前ら？俺は今、俺の作戦を無駄にしたこいつと話してんだよ？」

全く、助けようとして考えた事なのに助けようとした奴に台無しにされて自滅して、俺完全に痛い人じゃん！

ていうか元々お前らがビリビリをナンパしてたのが原因じゃねーか！

「あと文句ならあるよ！女の子1人にこんな大勢で、恥ずかしくねーのか！それにこいつを良く見てろよ！確かに見た目は可愛いし、制服からもお嬢様学校の生徒である事が分かる。でもまだガキだろ！」

カチン

なんか変な擬音が聴こえた気がするが気にしても仕方ない、スルーだ。今はこいつらを諦めさせ無ければ。

「お前らも見ただろ、このガサツな態度に口調、まだ反抗期も抜けてねー。そんなガキだぞ？俺はな、お前らのような群れなきゃガキ1人相手にできないズルい奴らは見てて不愉快だしムカつくんだ

よ！」

「…私が一番ムカつくのは…」

俺が言い終わったあとにそんなつぶやきが聴こえた。

今まで話してて気がつかなかったが、不良の何名かが俺とは全然違う方を見てる。それになんかバチバチ鳴ってるのが聴こえた。

俺はつぶやきが聴こえた方であり、不良達が見てる方であり、バチバチ鳴ってる方を見る。

そこには能力である電気を蒼白くほとばしらせいる御坂がいた…

「（やばっ？）」

「お前だーーーー！！！！！！！！」

咄嗟に右手を前に突き出す。次の瞬間、御坂を中心に電気が広範囲に発せられた。

幻想殺しの力により俺が電気を食らう事はなかった。だが周りの不良はそうはいかなかったようで、「あばばばばば！」とか言葉を漏らし、最終的には黒焦げになって倒れた。

…ていうか俺、学園都市に来て始めて力を使ったな。

御坂は能力を使った事による結果が、俺が立っているという予想と違う事実に驚いてる。

「…あんた、なんで私の電撃が効いてないのよ?どんな能力を使ったの?」

「な、何でなんでしょうか?それにワタクシは無能力者（レベル０）ですよ?う、運が良かっただけじゃないか?」

おい俺、よくそんな嘘がつけたな。

「運が良かったんじゃないか?」だって?運なんて俺とは無縁の物なのにな……自分で言ってて悲しくなって来た。

「そう…あくまで白を切るつもりね?まあ別にいいわ…」

「（よ、よかった…これで帰れる。）」

そう思った。

じゃあ、大丈夫そうだし俺はこれで…そんな風に伝えようとした…が、そこで見えてしまった。

御坂の好奇心たっぷりな表情と、口が開いていくのが…

おい、やめてくれ。それ以上何も言うな。その先には良い事なんてきっと何もない…だからお願い!何も言わないで~!

「力尽くであばいてやるんだから!」

「どうしてこうなった~?」

俺はそう叫ぶと全力疾走で駆け出す。

「　あ、こら!」

それを見て慌てて御坂も走って追いかけてくる。
必死に逃げ回る普通の男子高校生と、それを電気を出しながら追いかけるお嬢様学校の女子中学生。傍目から見たらなんとシュールな事だろうな。
だが他人の目など気にしていられるか！俺は暗くなった町を全力で駆け抜けて行った…

「待ちなさいよ？」

「不幸だーーーーー！！！！！」

…
…
…

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ビリビリ

私の名前は御坂美琴。この学園都市の7人いる超能力者（レベル5）の第3位よ。

突然だけど私は今、ナンパにあっている。
別に対したことじゃないわ、こんな事しょっちゅうだし…　でも、私に話しかけてくるなんてバカな連中ね…

今の私の状態を見て見ぬ振りで通り過ぎている人達いる。
別に彼らが薄情な訳じゃない…実際ここに割って入って来ても何かできる訳じゃないし、怪我をするだけ…見ず知らずの人間の為にそんな事する奴がいたとしたら、そいつはただのバカか、よっぽどのお人好しか…

「お、居たいた。すんません連れがお世話になりました。ダメだろかってにいなくなっ…た…ら…ま、まあ見つかったから良かったけど。じゃ、じゃあ俺達はこれで…」

どうやら、そのよっぽどのバカかお人好しが現れたみたいね。
そいつは、ツンツン髪の結構顔が整ってる男だったわ…知り合いを装って私を連れ出そうとしてるみたい。
私を見て言葉を詰まらせながら驚いてるみたいだけど、もしかして本当に私を知ってるの?でも少なくとも私は知らない。だから…

「誰あんた?」

そう言ってやったわ。

「ちょ、おまっ!空気読めよ?今の流れをどうしてそんなバッサリ切り捨ててんだよ!俺の作戦が台無しじゃねーか!」

「なんで私がそんなことしなきゃなんないのよ。それにあんたの作戦なんか知らないわよ。」

「何だテメェ?舐めた真似してんじゃねーぞ。」

「なんか文句でもあんのか？ああん？」

「うるせさいんだよお前ら？俺は今、俺の作戦を無駄にしたこいつと話してんだよ？」

私は別にあんたと話してたつもりはないけどね…

「あと文句ならあるよ！女の子1人にこんな大勢で、恥ずかしくねーのか！それにこいつを良く見てろよ！確かに見た目は可愛いし、制服からもお嬢様学校の生徒である事が分かる。」

「（へ、へぇー…）」

これには私も感心した…人間誰だって自分かわいさを持ってる…けどこいつはそれでもこうやって割って入って来て文句を言っている。

そしてこんな時にあんな事を言うなんて…少しどぎまぎしてしまった。

けど…

「でもまだガキだろ！」

…自分の中でカチンって音がしたのがはっきり分かったわ。

そしてこいつがよっぽどのバカだってことも分かったわ…！

「お前らも見ただろ、このガサツな態度に口調、まだ反抗期も抜けてねー。そんなガキだぞ？俺はな、お前らのような群れなきゃガキ1人相手にできないズルい奴らは見てて不愉快だしムカつくんだよ！」

しかもこっちが黙ってるのをいい事にまたベラベラと…！
自分が無意識に電撃を操ってるのが分かる。

「…私が一番ムカつくのは…」

そのつぶやきに気づいたのか、こっちを見て焦った表情をしている。でも…もう遅い！

「お前だーーーーー！！！！！！！」

怒りと共に叫び、そこら中に電撃を打つ。あいつらが叫び声を挙げてるのか聞こえるわ。

電撃を止めると人がばたりと倒れる音がした…これで全員やったわね。

そう思い帰ろうとして気づいた…あのバカこちらに腕を構えて、無傷で立ってる事に…
辺り一面に放ったから躱せるとは思えない、こいつの能力なんだろうけど、一体どんな能力なの？

「…あんた、なんで私の電撃が効いてないのよ？どんな能力を使ったの？」

「な、何でなんでしょうか？それにワタクシは無能力者（レベル０）ですよ？う、運が良かっただけじゃないか？」

無能力者（レベル０）？そんな見え透いた嘘、良くつけたもんね…

「そう…あくまで白を切るつもりね？まあ別にいいわ…」

「（よ、よかった…これで帰れる。）」

…この表情、きっとよかったとか思ってるわね…けど何を安心してるのかしら？本当の地獄が始まるのに…

私は言葉を続けようと口を開く。このバカはそれに気づいて顔を青ざめさせているわね。

「力尽くであばいてやるんだから！」

「どうしてこうなった～？」　あいつはそう叫んだら脱兎のごとく逃げ始めた。

「あ、こら！（は、早い？）」　なんて逃げ足の速さなの？でも、せっかく面白そうなやつを見つけたんだから、逃がさないわよ！

「待ちなさいよ？」

ほんと、この街は退屈しないわね！

関わっても面倒なだけ（後書き）

やっとって感じですね。

因みにこの時点ではまだ恋愛フラグまでいってません。
イメージでは当麻のことを調べてるうちに、だんだん気になりだしていくというのでいこうかな？なんて思っております。
最終的に自覚するのはＡＩＭバーストの時か一通さん時ですかね？

レールガン編はあと二話挟んでからの予定です。

ギャップの差が可愛い（前書き）

無理やり感が否めなくも…

とりあえずどうぞ。

ギャップの差が可愛い

常盤台中学校には2人の超能力者（レベル5）がいる。

1人目は序列第3位の電撃使い（エレクトロマスター）で、超電磁砲（レールガン）と呼ばれる少女…御坂美琴（みさかみこと）。

電撃使いは学園都市でもそれほど珍しい能力ではない。その電撃使いが超能力者（レベル5）で第3位となっているのは、その応用性の高さからだろう

さらに彼女は低能力者（レベル1）から超能力者（レベル5）に上がっているというのも大きい。

そして、もう一人の超能力者（レベル5）が序列第5位の精神系の能力者で心理掌握（メンタルアウト）と呼ばれる少女…食蜂操祈（しょくほうみさき）。

第5位で同じ学校に第3位の超電磁砲がいる事から知名度は若干低いが、その能力の恐ろしさは第1位の一方通行（アクセラレータ）に勝るとも劣らない。

記憶の読心・人格の洗脳・離れた相手と念話・想いの消去・意思の増幅・思考の再現・感情の移植など多種の能力を一手に引き受けて使いこなし、十徳ナイフに例えられる。

常盤台に君臨する女王だ。

その心理掌握（メンタルアウト）が現実殺し兼幻想殺しに会ったらどうなるか…

食蜂操折はどのように感じるだろうか…

ｓｉｄｅ当麻

「ねぇ、どこ行くのぉ？」

どうも、上条当麻だ。

今俺はとある少女に絡まれている。

少女の容姿は、まず中学生にしては背が高く胸が大きい。レース入りの手袋とニーハイソックスを付け、髪は腰の辺りまで伸びて、金髪に多少茶色が混じったような色をしている。可愛らしい顔をしているが、立ち振る舞いに大人びた感じもある。

そして服装は…常盤台中学校の制服だ。

「別にただ帰るだけだが…なんか用かミサキチ？」

「用がなきゃ話しかけちゃいけなのぉ？」

少女の第５位の心理掌握で食蜂操折という。通称ミサキチだ。

ミサキチって呼ぶのは、ミサキチが冗談でそう呼んで欲しいみたいなこと言い出し、そのまま定着してしまった。

語尾に小文字が入る喋り方をしていて、ぶっちゃけアホの子っぽい。

「いやそういうわけじゃないけど…」

「ならいいじゃない。あと別に私が当麻先輩について行ってもいいよねぇ？」

そう言ったミサキチは俺の右腕を掴んで抱え込む。ってこれは流石に…

「おい、ついて来るのは良いけど…まさか家までついて来るつもりか？それに何してるんだ？周りの視線が痛いんだけど…」

「流石に途中で別れますよぉ。腕に関しては我慢してくださぁい♪」

「はぁ…ま、いいや…」

言っておくがこんな事されてるけど別に俺たちは恋人同士とか、そんな関係じゃない。いい友達だ。

ていうか、俺に恋人が出来るとは前世の生活からもできない事がわかっている。

多分これはこっちをからかってるんだと思うんだけど…全く、常盤台で厄介な奴はビリビリだけでいいってのに…

それよりどうしてこうなったか説明が必要か…

あれは、今日みたいに街を歩いていた時だ…

…

…

…

…

…

5月某日、俺は当てもなく街を歩いている。なぜそんな事をしているのかと言うと…気分だ。普段なら散歩なんかしないだろうな…

で何となく街を歩いて、これまた何となく辺りをキョロキョロしていると、暗い裏路地が視界に入った。
その路地には男が５人、女の子が４人だ。
不良が溜まってるとかなら別に問題ないんだろうけど、おかしいのは、

女１人以外、全員倒れてる

という事だ。

気になったので俺も路地に入って行き…唯一立っていた少女に話しかけた。

「おい、これはどうしたんだ？」

「ん？あんた何なのぉ？こいつらのことなら私がやったんだけどねぇ。」

「（この子がやった？見た所倒れてる奴らに外傷は無いが…）」

とそこで気づく…少女の制服が常盤台のものである事に…

「（という事は能力か？でも大抵の能力なら外傷が付いちまうと思うんだが…まあ、聞くのが早いか。）…なあ、こいつら何なんだ？能力をつかって倒したようだが、どんな能力かも聞いていいか？」

「随分と知りたがりだねぇ。でもいいよぉ、教えてあげる。こいつらは何処にでもいるただの不良（ゴミ）でぇ、なんかいちゃもんつけて絡んできたから能力でチョイチョイとねぇ。常盤台の女王って聞いたことあるでしょ？超能力者（レベル５）で心理掌握って呼ばれてるの

ぉ…それ、私なんだよねぇ。つまりこいつらは私の改造力でこうなってるわけだねぇ。」

第5位の超能力者（レベル5）だったのか！これは驚いた。こんな奴だったのか…

魔術の方の原作には全然出てこなかったからわからなかった。

精神系ならに外傷がない事に納得できる。

だが気になる事がある…

「お前、こいつらが倒れるまで精神を弄ったのか？廃人になったらどうするんだ？」

「何か問題でもあるわけぇ？別にこいつらがどうなったって関係ないでしょ？」

「なっ？お前、躊躇とかしないのか？」

「なんで能力を使うのに躊躇する必要があるのよぉ。それこれ関係ないでしょう？」

「フザケンナ！！！！！」

「っ？」ビクッ

こいつ、自分以外の事を何とも思ってない。自分の能力で起こった事をどうでもいいだと？こんなに狂ってる奴がいるとはな…

吹寄の時以来だろうな、こんなにムカついたのは…

「な、何を怒ってるのよぉ！」

「そんな事も分かんねーのか！世の中には自分の好き勝手しちゃいけねーもんがあんだよ！お前みたいに簡単に干渉出来たりしちまう能力があるからそんな当たり前の事が分からなくなるんだ！」

そういいながらどんどん近づいて行く。

相手は女だが手をだしてでも教えてやらなきゃいけない事もある。

「な、何？説教のつもりなのぉ？それにお前なんか私の操作力で…え？あれぇ？」

第５位が手に持っていたリモコンをこちらに向けて能力を使ってるみたいだが俺には幻想殺しがあるからな、精神系の能力なんか効くわけねーだろ

「どうした？早くご自慢の能力とやらで俺の精神を操ってみろよ。」

「ど、どうして効かないのよぉ？こ、来ないで！来ないでよぉ？」

第５位は能力が効かないことにパニックになっている。

そして俺から逃げる始めたが、ここは裏路地、後ろには壁しかない。

「逃げ場なんてねーよ、裏路地にいた事が運の尽きだな。」

「ごめんなさい！お願いだから許して！ヒィッ！」

俺が右手を降り挙げて殴る構えをしたのだが、第５位は耳を抑えてしゃがみ込んでしまった。

「……」

「ッッッ」ブルブル

「……」

「ッッッッ」ブルブル

……やり過ぎたか？

もう尋常じゃないくらい涙目になってるし…

いくらイカれた奴だとはいえ、こんな状態の奴を殴るのは流石に…無理だ。

仕方がない…そう思いまずはこいつの頭に手を乗せる。

乗せた瞬間にビクッてなった。

…さっきまでの威勢の良さ、ほんとどこ行った。

んで、その手でそのまま頭を撫でてやると震えが止まりこちらを見上げてくる。

「え？」って思ってるのがわかるな。

「悪かった、頭に血が登ってたとはいえやり過ぎた。ごめんな。」

「…」

「お前の能力がいかにヤバイものか教えてやりたかったんだ。お前今、俺が恐かっただろ？」

「…」コクッ

「お前の能力は、今お前が感じたものと同じくらいの物を他人にも

植え付ける事が出来る。もしかしたらそれで取り返しのつかない事になっちまうかもしれない。他人の人生をダメにするだけじゃなく、恨み買って最悪自分の人生もダメにしてしまう可能性もあるんだからな。」

「…」

「それに友達も無くすぞ。」

「…別に友達なんていいけどぉ」

「そんな悲しい事いうなよ。世の中は作りたくても作れないやつだっているんだから……俺みたいにな。」

「…」

「何なら俺と友達になってくれないか？」

俺はそう言って、手を差し伸べる。

「……後悔するかもしれないよぉ？」

「ん？なんでだ？」

「…また同じ事を繰り返すかもしれないしぃ…」

「そん時はまた教えてやるよ。」

「…我儘言って迷惑かけるかもしれないよぉ？」

「別に構わないよ。むしろどんとこい！」ニコッ

微笑みながら言ってやった。

恐る恐るという感じだけど手を伸ばし、しっかりと俺の手を掴んでくれた。

…

…

…

…

って感じのエピソードがあった訳だ。それからはミサキチは無闇に力を使う事をやめたみたいだな…

あと、あの時倒れてた奴らは脳波が若干弱ってたみたいだけど別にこれくらいなら回復するらしい。あと、弄った精神も元に戻した。ミサキチが。

いや～、説教したかいがあったってもんだな。やっぱ変わろうとすれば変われるもんなんだよな。

まあ、変わりすぎじゃね？とも思うけどな…

「当麻先輩、早く行くよぉ！」

「ちょ、引っ張んなよ！」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

side　ミサキチ

今までの私は本当にバカで傲慢だったっておもうわぁ。

私は自分に口答えした奴は私の能力で精神改造しちゃったから私が間違いに気づく事なんてなかったものねぇ。

でも当麻先輩はなぜか私の能力が効かないからそれでやっと間違いに気づいたわぁ。

初めて会った時の当麻先輩は本当に怖かったけどぉ、今じゃこの出会いは運命じゃないかなんて思ってるのよねぇ。

だって、能力の効かない当麻先輩なら私の能力の一旦である操作力で万が一操る事も出来ないでしょ？

正直まだイラついたりしたら能力使っちゃいそうだし、そういう意味では最高のパートナーだと思うのぉ。

当麻先輩は私の事を友達と思ってるみたいだけど、私はそれで終わるつもりは無いから覚悟してねぇ。

いつか貴方のハートを操(うば)っちゃうぞ☆

ギャップの差が可愛い（後書き）

ミサキチの性格はこれで良かったのでしょうか？

ミサキチも喋り方が結構特殊だったのですが、まだ楽な方かな？とか思ってたら死にそうになりました。

自分はレールガンの原作の方でミサキチを見ておらず、ｗｉｋｉ頼りでした。だからキャラが激しく不安です。

ストックはあるのですが、まだまだ数が少ないので増やしながらの投稿となります。

それでも毎日頑張って投稿しようと思いますので今度もよろしくお願いします。

闇？なにそれそげぶできんの？

どこの世界に於いても必ず闇は存在する。この場合の闇というのは人には知られざるとかそういった意味でどこにあるかも分からない。

会社や企業だったり、その土地一帯だったり、教育現場にもあるかもしれない。

教育現場といえば、学園都市にも闇は存在する。それも、この世界で一番大きな闇かもしれない。

なぜこんな事を話すのかだが、上条当麻はその闇を知った人物に会う。

そして上条当麻は闇に染まった者すら助けに行くということを覚えておいて欲しい。

ｓｉｄｅ当麻

突然だがわたくし、上条当麻は不幸である。今まで語ってなかったが様々な不幸に遭遇している。

例えば雨の日、水溜りを軽いジャンプして避けたら着地点に石ころがあり滑って水溜りに上半身から浸かりにいったことがあった。

さらにそのせいで携帯がオシャカとなり買い換えるハメになったりとかあった。

なぜ俺が不幸であるという当たり前のことを今更言っているのか

と言うと、現在進行形で不幸な目に合っているからだ。しかもまた水関係。

詳細はというと、普通に学校の廊下を歩いていたらスプリンクラーが誤作動を起こしピンポイントで俺はずぶ濡れに…といった感じだ。

「相変わらずお前は意味分からないことになってるけど」

そしてそれを楽しそうに、本当に楽しそうに見ている女生徒がいる。

「…楽しそうですね先輩」

「実に楽しいよ。そしてそんな不幸で面白いお前を愛おしく思うけど」

彼女の名前は雲川芹亜（くもかわせりあ）という。俺の先輩だ。

容姿は黒い髪を肩まで伸ばし赤いカチューシャで前髪を後ろにしている。美人で巨乳であり、その胸はこの学校指定の制服をこれでもかってくらい押し上げている。

「…それは嫌味ですか？冗談は休み休み言って下さいよ」

「…別に冗談ではないんだけど（ボソ）…それよりお前の不幸はどういう理屈なんだろうな。詳しく調べてみたらまた面白い法則でも見つかるかもしれんけどな」

俺がジト目で言っても何も変化がないし、それどころか更に面白

さを追求しようと検査まで提案するとは…もう呆れるしかない。

てか最初に何言ったんだ？小さすぎて聞こえなかった。

「ほんっっっとうに楽しそうですね？憎たらしいくらいに…」

「ふふ、ほんっっっとうに楽しいよ。この学校はいろんな刺激に溢れてるから」

せめてもの意思返しのつもりで言った言葉も軽く流されてしまう。そして最後に意味深そうな事をつぶやいていた。それが何となく怪しい雰囲気を出している。

原作でどんな人だったか知っていたため前あった時にこの人に言ったことがある、「危険な目に遭ったらいつでも言ってください」って…

正確には違った気がするけどそれに近いことを言った筈だ。

そもそもこの人との出会いは、向こうがいきなり話しかけて来たのだ。

なんでも「お前が面白いから気に入った」とかなんとからしい。

「はぁ…（全く、俺は過去も未来もこの人に振り回され続けるんだろうな）」

俺はため息を吐くしかなかった。

side out

ｓｉｄｅ雲川

私は少なからずこの学園都市の闇と関わっている。統括理事の貝積継敏のブレインをやっているんだけど。

私の仕事は考えるだけだけど、たまに指示を出したりもする。

そしてこれが楽しいんだけどな。刺激に溢れているから。

私は今学校の授業を受けているんだけど、これがつまらないことこの上ない。

外では別のクラスが体育でサッカーをしていたから何となくそっちを見ている。つまらない授業よりはよっぽど有意義だと思ったからなんだけど。

ある男子生徒が視界に入った。その男子生徒はツンツン髪でほんの少し気だるげな雰囲気をしているけど、授業は真面目にやっているみたいだけど。

その男子生徒は運動神経がいいのかグラウンドの中央辺りからボールをパスされるとドリブルで何人か敵を躱してあっという間にゴール周辺にまで持って行ってしまった。

その男子生徒をしばらく観察していて面白いと思ったんだけど。

別に運動神経が良さそうだったからというわけではないんだけど。

別の生徒が高く蹴り上げたボールがイレギュラーなバウンドをしてその生徒に当たった。

「ごふっ？」とか言ってると思うけど。

でも別にそれくらいならよくある事なのかもしれないんだけど…
それが繰り返されること１０回。
ゴールポストで跳ね返ったボールが当たる事３回。
フリーキックがその生徒に直撃する事２回。
誰かがとりあえずという感じに思い切り蹴ったボールが直撃する事３２回。

不幸にも程があると思うんだけど。

その不幸さが気に入ったから、その生徒を見つけ出して話しかけてみたのだけど。

「ちょっといいか？」

「ん？あなたなんですか？」

「私は雲川芹亜っていうんだけど。一応お前の先輩だけど。体育を見てて思ったんだけどお前は随分と面白いな。何なんだその不幸さは」

「…確かに俺は不幸にだと思いますけど、それを面白いとか言われたのは始めてですね」

「そう気を落とすな。それより私は名乗ったのだからお前の名前を効かせてくれるといいんだけど」

「…俺は上条当麻っていいます」

「上条当麻か…（確か幻想殺しの名前がそんなだった気がするけど

…)

…よし覚えた。所で上条、私は流石にお前の不幸を不憫に思ったんだけど。最初は興味だけだったんだけど、お前の不幸の相談に乗ってやろうと思ってな。何かあったら言ってくれて構わないけど」

「…先輩って結構いい人なんですね」

「私自身はそうとは思わないけど。あと私は刺激ある生活が好きなんだけど、一度お前の一日の不幸を観察させてくれないか？」

「俺のさっきの言葉は忘れて下さい」

不幸を抜きにしてもなかなか面白そうな奴だったけど…ふふ、これから楽しくなりそうだけど。

「まあ用というのはそれだけだけど、時間を取らせて悪かったな。また会おう」

「ちょっと待ってください。」

私が立ち去ろうとした時に向こうから話しかけて来た。なんなのだろうな。

「どうした？早速相談があるというのなら聞くのだけど」

「先輩ってなにか危ないことやってませんよね」

これには危うく表情に出しそうになったけど、なんとか持ち堪えた。

急に何を言い出すのだろうか、私が闇に関わってると知ってると

は思わないんだけど。

「…なんでそう思ったんだ。」

「いや、なんていうか…雰囲気ですかね。怪しいというか何というか、そんな感じがしたんですけど。」

雰囲気って、どんなのだか気になるんだけど。

「もし本当に危険なことになったら言って下さい。先輩が相談に乗ってくれるのはわかったんで俺も先輩の相談に乗ります。その時はいつでも助けに行きますから。」ニコッ

「…／／」

こいつはなんていう殺人的な笑顔をするんだ。思わず顔をそらしてしまったんだけど。

よく顔を見てみたらなかなかかっこいい顔をしているな。

不幸で面白くて顔も良い、結構いいかもしれないんだけど。

「あの、どうかしました？」

「…いや、なんでもない」

こいつはもしかしたら鈍感かもしれんな。でも、それはそれで面白そうだけど。

「それじゃあ今度こそ私は行くけど。機会があったらその時は頼らせてもらうけどね。」

「ええ、待ってますよ。」

それで私達は別れたのだけど、上条が行った方向からなんか聞こえるんだけど。

「カミやん！さっきの女のひとは誰なんだにゃー！」

「おのれはまたフラグ立てたんかいな！これは一度Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩせんとあかんな！」

「てなわけで吹寄さ～ん！カミやんがまたフラグ立てたんだぜい！」

「何ですって！上条当麻、貴様はまた性懲りもなく次から次へと！」

「ちょ！何だよお前らフラグなんか立ってねーっつの！だから吹寄さん、その高く振り上げた右腕は俺には降ろさないでごふぁっ？」

…ほんと、これから面白くなりそうなんだ。

上条が生きていたらの話だけど。

闇？なにそれそげぶできんの？（後書き）

ようやく次でレールガンの原作に入る事が出来ます。

今回については特にありません

今後もよろしくお願いします。

友は友を呼ぶ。別に呼ばなくてもいい（前書き）

やっとここまできた～～～？

あと、今回ちょっとくどいくらい同じ単語を使います。
不快に感じるかもしれません。
先に謝っておきます。

申し訳ございません。

それと誰が喋ってるのかわかりずらいかもしれません。
要望があったら分かるように編集しようと思います

友は友を呼ぶ。別に呼ばなくてもいい

人の繋がりは絶える事はない。
友は友を呼びその友は新たな友を…という様に連鎖していくものだと思う。

上条当麻には出会いが毎日毎日出会いが絶えない。不幸スキルも合わさって普通よりもすごい事になっている。

そして今回、また新たな出会いをする。1人を通して3人と…

その出会いは大いにこれからに影響してくるだろう。

side　当麻

初夏の日差しうっとおしく外に出るのが面倒になって来た今日この頃、面倒になってると言ったにも関わらず俺は外を歩いている。
学校の帰りだからだ…

時間帯は真昼間であり太陽が
俺の時間(じだい)キターーーー！
とばかりに猛っている。

誰(ニート)かが言ってたな…太陽と言えど毎日見ているとありがたみが無くなるって。
今ばかりはそう思うな。

今日は学校があったのになぜ真昼間の時間帯を歩いているのかというと、能力診断（システムスキャン）により帰りが早くなっているためだ。

因みに結果は言わずもがな…無能力者（レベル０）だ。

現実殺しもあるのに、何でだろうな？やっぱり幻想殺しと同じ無効化系統だからかな？

それとも転生の時の認識の仕方でそうなってしまったのだろうか…

つーか能力診断（システムスキャン）なんて定期的ににやって変わるもんなんだろうか…能力の強さなんて、そうそう変わる物じゃ無いと思うんだけどな。

あ、話を戻すけど先程から面倒だと言っていてやる気が根こそぎ奪われてる今この瞬間、これまた面倒な奴に遭遇してしまった。

「あ、あんた…また会ったわね！今度こそちゃんと勝負しなさい！」

「うるせーってのビリビリ。俺は心の中で大自然に文句言ってて忙しいんだよ」

ああ、これ絶対不幸スキルが発動してるって…はぁ、不幸だ。

「それに勝負って言うのはいいが、見た感じ連れがいるんじゃないのか？」

「くっ、そうだった…！」

そしてこの会話でわかったと思うが相手はビリビリ一人じゃありません。他に３人女の子がいます。

「あのお姉様、こちらの殿方はいったい誰なんです？」

「それに御坂さんの事をビリビリって呼んでませんでした？」

「もしかして２人はそういう関係なんですか？」

「まあ？お姉様はわたくしというものがありながらこの殿方とそんな関係に？いけません、いけませんわお姉様！」

「な？なに言ってるのよこのバカ！そんな訳ないじゃない！そっちの２人も勘違いしないでね！」

ビリビリが顔を赤くしながら焦って否定してるな。

今の会話は上から順に

女１→女２→女３→女１→ビリビリ

という順番だ。

女１は常盤台の制服を着ていて茶髪をツインテールにしている小柄な少女。

女２はどこの制服だかちょっと分からないけど黒髪のショートで最大の特徴は頭に花が大量に付けて…いや、生えている様に見える。

女３は女２と同じ制服を着ていて黒髪のロングだ。白い花のヘアピンを付けててこの御坂以外の少女達の中で一番背が高い。

読者の皆さまにはもうわかっていただけてると思う。まあ、メタ発言はもうやめておこう。

好き勝手な事言われない内に会話に参戦しなくては…

「あ～、俺は御坂の事をビリビリって呼んでるけど別に付き合ってるとかそんな関係じゃないから、勘違いするなよ？」

「あら、そうでした？それならそうとお姉様も早く行ってくだされば良かったのに…」

「私は言おうとしたわよ！あんたが勝手に暴走したんじゃない！」

「それじゃあこの人は誰で結局の所どんな関係なんですか？」

「こいつの名前は…上条当麻よ」

「あれ？俺ってお前に名乗った事あったっけ？」

「え？あ…そ、その、えっと…」

こいつ、まさかとは思うが…

「お前もしかしてデータバンクにハッk「そ、それよりもこいつとの関係だったわね？」…」

流されたか…まあいい、このままじゃ話が進まないからな。今は見逃しといてやる。

そしてこのネタを盾にして…ふっ

「こいつとの関係は…何だろう？」

「加害者と被害者」

「「「へっ？」」」　「なっ？」

加害者の時にビリビリを指差し、被害者の時に自分を指差す。
俺たちの関係を一言で表すとしたら、これ以上の何があるっていうんだ？

「だってそうだろ。いつも遭遇する度にビリビリビリビリ、お前を加害者よ呼ばずに何があるってんだよ。」

いや、もしくはターミ〇ーターか？そうだ、今度追いかけられた時は『デデンデンデデン～♪』っていう音楽を流しながら逃亡してみるか。

「あんた、人聞きの悪いこと言うな！」ビリビリ！

「うおっ？」

こいつ！人が考え事してる時に電撃飛ばして来やがった！

「ちょ、お姉様！いきなり人間に電撃を飛ばすなんて、ご自分の力の強さを認識して下さいな！」

「うっさいわよ黒子！こいつが悪いのよ」

「み、御坂さんって結構アグレッシブなんですね…」

「そしてその超能力者（レベル５）の電撃を慣れた感じで避けるなんて、この人もどうかしてるような？」

黒髪ロングの子、苦労の末だよ。そう、苦労のな…
それより俺はこいつら…というより３人に伝えたい事がある。

3人を見て、御坂を指差して一言…

「な?ビリビリで加害者だろ?」

「「「……」」」

「な、なんなのよその視線は!それに佐天さんや初春さんまでそういう風に思ってるの?」

「だってお姉様、たった今それをやって見せたではありませんの。」

「ぐっ…!」

「…え、えっとぉ」

「あ、あはは…」

ふっ、勝ったな…
こいつには面倒事ばかりかけられてたから気分がいいな。

俺が勝利の笑みを浮かべているとそれに気づいた御坂が余計に腹を立てて「ぐぬぬぬぬ……!」とか言っている。
ああ、本当に気分がいい!
…キャラが変わってるな、俺。

「それはそうと「良くないわよ!」…そっちの3人も自己紹介してくれないか?」

「あ、これは失礼致しました。わたくしの名前は白井黒子ですわ。お姉様の後輩で常盤台中学校に通っておりますの。」

「私の名前は初春飾利です。柵川中学校に通っていて、白井さんとはジャッジメントで同じ部署に務めてます。」

「私は佐天涙子でーす。初春とは同じ学校でクラスメイトでーす。」

まあ、分かってはいたがレールガン組のあの子達だった。

「さっきビリビリに言われたけど改めて言う、上条当麻だ。好きな様に呼んでくれ。」

こうして俺たちは自己紹介をしたんだが、なんか御坂が「なによ皆して…もう」とかいじけてる。

本音を言えばそういう所は可愛らしいんだが、いつも会う時は追いかけられるから、それを全く感じさせないな。

「所でこれから私達、ゲーセンに行こうって話になったんですけど…上条もどうですか？」

「さ、佐天さん？」

「え？いいのか？」

「別にわたくしは構いませんけど…お姉様のお知り合いですし、何よりお姉様が迷惑を掛けている事ですのでせめてものお詫びのつもりですの。」

「黒子に初春さんまで…はぁ、分かったわよ。あんたも来て良いわよ。」

「いや、でも…女の子達の中に男1人というのもなんか…」

「別にいいじゃないですか。それに、私たちみたいな可愛い子達に囲まれてるんですから男としては本望じゃないですか？」

「佐天さん、可愛いって自分で言いますか？」

「いや、確かにお前達は可愛い方だと思うが、それが逆に悩ませるっていうか…」

わかるだろ？可愛いすぎるとか綺麗すぎるとかって、逆に近寄り難いっていうのが。

「「「「……」」」」

「ん？どうしたんだ急に黙って」

心境を語ってたらなんか視線を感じた。４人が４人ともこっちを見てた…どうしたんだ？

「いや、なんていうか…ねぇ」

「そういう事を恥ずかし気もなく言われますと…」

「どう反応したらいいのか困りますよね」

「ていうか私、からかったつもりだったんですけど、こっちが恥ずかしくなって来ましたよ」

「？…俺はただ本当の事を言っただけなんだが…可愛いと言われたら別に誇ってもいいんじゃないか？」

「「「「……／／」」」」

なんか今度は赤くなって俯いてしまった。
赤くなってるのは…暑くて火照ってるからか？

「そ、それより移動しない？」

「そ、そうですわね。こんな炎天下の中で留まって居られませんわ」

「そ、それがいいですよ。そうしましょう」

「え、えっと目的地はゲーセンでしたっけ？それじゃあ行きますか」

「？あぁ、わかった。」

固まったと思ったら今度は焦り出したり、忙しい奴等だな。
っと、考え事してたら置いて行かれる。

俺は早足でついて行くのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ御坂

今日は能力診断（システムスキャン）の後に黒子の友達で私のファンだっていう子と会

う事になった。

ファミレスで待っていたんだけど来たのは2人だったわ。どうやら黒子の友達とそのクラスメイト見たいね。

「は、初めまして。初春飾利…です」

「どうもー、初春のクラスメイトの佐天涙子でーす。なんだか知らないけどついて来ちゃいましたー。因みに能力値は無能力者（レベル0）でーす。」

「初春さんに佐天さん…
私は御坂美琴、よろしく。」

佐天さんは自分のレベルにコンプレックスがあるみたいだけど、レベルなんて関係ない。

軽く自己紹介を済ませた所で私がゲーセンに行こうと提案し、いざ出発しようとした所で…あいつが現れた。

「あ、あんた…また会ったわね！今度こそちゃんと勝負しなさい！」

「うるせーってのビリビリ。俺は心の中で大自然に文句言ってて忙しいんだよ」

相変わらずわけの分からない事言ってるけど…上条当麻だったわね、データバンクをハッキングしたから覚えてるわ。

一番最初に会った時にこいつは自分の事を無能力者（レベル0）とか言ってたけど、その時はもちろん嘘だと思った。

でもデータバンクで確認したら本当にレベル0だったわ。

あり得ない。だったらどうして私の電撃が効かないのか疑問だったけど結局分からず終い。どうしようもなかった。

考えれば考える程気になっていくし、四六時中あいつの事ばかり気にしてて…ってこれじゃああいつが好きみたいじゃない！

でも気になってるのは事実だし…いっその事聞いてみるか…って思ってる時にタイミング良く現れるし、全く持って不幸よね？

それに諦めて聞くなんて私らしくない。やっぱり闘って勝って聞き出さなくちゃね。

でも今はあいつに言われた通り連れが居るし…
こんなに近くに居るのに諦めるしか無いなんて…はぁ…

そんな思いとは裏腹に話がどんどん進んでいく。
こいつとの関係を聞かれたり名前を聞かれたり…

あいつから名前を直接聞いたことは無かったのに名前を答えちゃったりして危うく黒子達にハッキングがばれそうになった時は焦ったわ。

でもこいつにはバレてるみたいね。なんか意味あり気な視線を向けられたし、後で口封じを考えなければ…

で、なんだかんだでこいつがゲーセンについて来るって話になっていて、私は渋ったけど他の黒子達はＯＫしちゃって断るに断れなくって、結局私が折れた。

でもこいつは全員からの了解が出たのにまだ渋ってる。

そこで佐天さんが…

「別にいいじゃないですか。それに、私たちみたいな可愛い子達に囲まれてるんですから男としては本望じゃないですか？」

…って言った。冗談で言ったのはなんとなく分かったけど、それに対してこいつは…

「いや、確かにお前達は可愛い方だと思うが、それが逆に悩ませるっていうか…」

…なんで恥ずかし気も無くそんな事が言えるのよ！ほら、皆固まってるじゃない！

「？…俺はただ本当の事を言っただけなんだが…可愛いと言われたら別に誇ってもいいんじゃないか？」

…多分私は赤面してると思うわ。皆も顔赤いし…
こいつはなんで追い打ちを掛けるみたいに…！
だ、ダメだわ、このままだとあいつにペースを崩される。

「そ、それより移動しない？」

私の提案に皆はすぐ乗ってくれたわ。すぐに移動できた。
皆も考えてる事は同じみたいね。

ゲーセンに向かって歩き出したんだけど移動してる最中に黒子が話し掛けて来たわ。

「お姉様、あの殿方はいったい何者なのですか？あんなくさい台詞をスラスラ言うなんて、どうかしてますの」

「私だって知らなかったわよ。あんな奴だったなんて」

「…お姉様ってあの殿方の事をどの程度知ってるのですか？まさか追い回してただけで全然知らないなんて事はありませんわよね」

「…」

そういえば私、あいつの事なんて全然知らなかった。
知ってる事といえば能力値とか通ってる学校とか、バンクで見れる程度のことだけ。
あいつって何者なんだろう？

「その沈黙は図星と見て間違いありませんわね。ただ追い回してただけだなんて、これじゃあビリビリなんて呼ばれても仕方ありませんの。」

「ぐっ…うっさいわね」

…やっぱり一度聞いてみた方がいいのかもしれない…

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　佐天

私達はゲーセンに向かって移動している。

私は常盤台中学校の超能力者（レベル５）と聞いて、どうせ能力を笠に着た上から目線のいけ好かない奴だと思っていた。

しかし実際あってみてどうだろう。私が無能力者（レベル０）だってことを言っても全然気にした様子は無い。それに…

「なんかさ…全然お嬢様っぽくなくない？」

「上から目線でもないですね～」

予想と全然違ったためこちらの調子が崩されてしまった。

さっきの会話で御坂さんを皆が弄ってた時もツッコミ入れたりいじけたり、どう見ても普通の中学生だった。

そういえば御坂さんの知り合いっぽいこの上条当麻って人…

「ねぇ初春、上条さんって御坂の知り合いみたいだけど、普段はどんな人なんだろう」

「御坂さんと知り合いなんですから、すごい人かもしれないですよね」

「だよね～、分かった事といえば結構天然かもしれないって事ぐらい」

「佐天さんの冗談にも本気で返事してるみたいでしたし…ちょっと恥ずかしくなっちゃいました」

「それを言った私の方が恥ずかしいって」

私たちの所に突然現れて、御坂しんに勝負を挑まれてた上条さん。
この人もまだ分からない事ばかりだ。御坂さんと知り合いなんだからそれなりの名門校に通ってると思うんだけど…

「御坂さんの知り合いだし、やっぱりレベルも高いのかな？」

「可能性は十分ありますよね。それに御坂にちょくちょく勝負を挑まれてるみたいな節がありますけど、直接勝負してないにしても御坂さんから逃げ回ってるみたいですから結構能力も強い…筈なんですけど…」

「強い能力を持ってるなら噂くらいにはなってるよね～。ジャッジメントでは名前は聞いた事無い？」

「少なくとも私はありませんよ。白井さんはどうか分からないですけど…」

上条当麻なんて名前、今まで聞いた事もない。
ジャッジメントの初春にも分からないとなると、直接聞いてみるしかないか…

「あの、上条さんってレベルはいくつなんですか？」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　当麻

「あの、上条さんってレベルはいくつなんですか？」

４人がそれぞれガールズトークをしていたので俺はそれ邪魔しない様に、先ほど道端で配られてたチラシを見ていると、急に佐天に声を掛けられた。

「そうだわ！こんな時間を歩いてるんだからあんたの学校でも能力（システム）診断（スキャン）があったんでしょ、レベルを教えなさいよ！」

「あ～もう、うるさいな。俺のレベルは０、正真正銘の無能力者だ」

「「「…えっ？」」」

「…なんでそこで疑問？」

俺ってどんな風に見られてんだ？

別に無能力者なんて珍しくも無いだろ。

「いえ、だってお姉様が興味を持ったお方ですし、それなりの能力をお持ちなのかとばかり思っておりましたわ」

「私と同じだったんだ…」

「私も御坂と知り合いなら能力を持っているのかと思ってました」

「あんた嘘つくんじゃないわよ！」

「嘘ついてどうすんだよ、そうすりゃレベルが変わるのか？あと佐天もレベル０だったのか。仲間だな、仲良くしようぜ」

「え？あ、はい…」

これで無能力者同盟は完成した、やったね。

…御坂の奴、まだ納得できなてないみたいだな…

「ビリビリ、納得できないって顔してるな…でも本当に無能力者だ。」

「…なんであんたがレベル０なのよ」

「あの、レベル０でもどんな能力かぐらいは分かったりしていないんですか」

「ああ、診断に来た人が言うには『君は完璧な無能力者だ。普通誰しも能力はあるものだけど、君みたいに本当に能力が無いケースは逆にレアだ』って事らしいぞ」

その人ももっと言い方があるだろ。なんでそんな夢を砕く様な言い方するかな？

「疑ってるならデータバンクでも確認したらどうだ？そのくらい出来るだろ」

「…そうね、後でデータバンクに潜ってみますか」

「「「「……」」」」

「…ん？どうかした」

「お前、今口を滑らせたな。」ニヤニヤ

「へ？…あっ？」

こいつ、俺がそのネタで弄る前に自爆しやがったｗｗ
しかもジャッジメントの２人の前でｗｗ

「おーい、ここに犯罪者がいるぞー！白井、初春！ジャッジメントの出番だ！…ぷっ」

「……お姉様」

「…御坂さん」

「…えーっと」

「ち、違うわよそんなわけないじゃ無いじゃない！だから黒子、その手に付ける拘束具を閉まって！初春さんも何処かに電話しようとしないで！佐天さん、離れて行かないでこっちに戻ってきて！そしてお前は笑うな！」

いやーおもしれーな！最高だわ！
ていうかなんか御坂が弄られキャラになってる様な…まあ原因は俺だけど。

それから数分かけてようやく落ち着いて来た。
そしてジャッジメントの２人は…

「…とりあえず聞かなかった事に致しますの」

「…そうですね」

「え？逮捕しないの？見逃しちゃうの？つまんね」

「あ、あんたは～…！」ビキビキ

「あ、あははは…」

御坂のやつ怒りで青筋立ててるな。

デコの辺りにムカつきマークが見える気がする。流石にやりすぎた気もするので、ごめんごめんって言いながら御坂の頭をクシャクシャっと撫でてやる。

「なっ？」とか言ってるけど気にしない。

「…なんなのよ、もう／／」

「そ、それよりさっきから上条さんはなんのチラシを見てるんですか？」

「ん？これか？なんか新しく出来たクレープ屋の宣伝だな。お前らも見るか？」

そうやってチラシを全員に見えるように突き出してやる。

「えーっとなになに？『クレープハウスらぶるん』」

「第７学区ふれあい広場にてＮＥＷ　ＯＰＥＮですの」

「先着１００名様にゲコ太マスコットプレゼントって書いてありますね」

「なにこのやっすいキャラ。今時こんなのに食いつく人なんて「な！ゲコ太？」って、え？」

「み、御坂さん？」

「あら～？お姉様はこのマスコットに興味がお有りで？」

「な、なに言ってんのよ！わ、私は別にゲコ太なんか…だってカエルよ？両生類よ？どこの世界にこんな物もらって喜ぶ女の子がいｒ「「あっ…」」…？」

なんか2人が見つけたのでそちら…というより御坂のカバンに目を向けるとそこには…カエルのストラップがぶら下がっていた。

「……／／」

「「……」」

「…ぷぷぷ」

「…両生類が、なんだってビリビリ？」ニヤニヤ

御坂は顔を赤くして、初春と佐天は呆然としている。白井は吹き出していて、俺はニヤニヤしながら御坂に質問する。

「わ、笑うなら笑なさいよ！／／」

「ぷっはははははは！！！あっははははは「やっぱり笑うなー！（ビリビリ）」はあぁぁーーー？」

危ねっ！こいつ笑えとか言ったから笑ったのに、笑ったら笑ったで電撃飛ばして来やがった！何だってんだ…

「なによ！私がゲコ太が好きじゃ可笑しいっていうの？」

「へ？別に可笑しくないだろ？」

「「「え？」」」

「じゃあなんで笑ったのよ！」

「…ああ、俺は盛大に自爆したお前を笑ったんだよ。別にカエル好きなのは笑ってないよ。」

どうやらこいつは勘違いしてるらいしな。

「いいか？俺は人の趣味なんてバカにしたりしないよ。それはその人の個性だし、むしろ尊重してやるべき事だ。」

「「「「……」」」」

「好きなことがあるっていうのはいい事だ。誇っていいと思うぞ。まあ、もし他の奴からバカにされたんだったら俺はお前を認めてやるよ。そしてバカにした奴を俺がバカにしに行ってやる。だからお前は気にするな、カエルが好きなままでいろ」ニコッ

そうやって微笑みながら頭を撫でてやる。

これでまた機嫌が治ってくれればいいんだが…

「…あ、ありがとう／／／」

「…なんか、凄いですね」

「へ？初春、何がだ？こんなの別に普通だろ？」

なんにも凄い事なんて無いと思うんだけど…？

少なくとも俺はそう思ってる。

「それが普通なんて言える事が凄いって言ってるんですの」

「ん～？そんなもんか？」

「そうですよ。私にはそんな事言えませんもん」

どうやらそんなもんらしい。俺にはよく分からないな。

「あ、そうだ。お前らも何かあったら言えよ？特に佐天。お前は無能力者だからって理由でバカにされそうだし…まあ、同じ無能力者の俺が言ってもっつーのもあるけどな」

「上条さん…」

「やっぱり凄いですね」

「まあ来るかはわかりませんが、その時は頼りにさせて頂きますの」

「おう！」ニコッ

「「「…／／／」」」

ん？なんかまた赤くなってるな…やっぱり暑いからか？

「んで、何時の間にか立ち止まってたけどそろそろ移動するか。ゲーセンのつもりだったけど、クレープ屋に変更でいいか？早くしないと無くなるしな、ゲコ太」

「え、ええ。お姉様のためですし／／」

「わ、私も別にそれでいいです／／」

「あ、あの…私も大丈夫です／／」

「み、皆…ありがとう／／」

「それじゃあ出発しますか」

俺たちは止まってた足を再び動かし出した。

まだあるといいけどな…

「…お姉様、本当になんですのこのお方は（ヒソヒソ）」

「そ、そんなこと私に言わないでよ（ヒソヒソ）」

「でも一応御坂さんのお知り合いと言う事ですし（ヒソヒソ）」

「この中じゃ御坂さんが一番知ってる筈なんですから（ヒソヒソ）」

「うっ…で、でも本当によく分からないし…（ヒソヒソ）」

「はぁ…お姉様、そのバトルマニアは治していただきませんと（ヒソヒソ）」

「な、なによバトルマニアって！（ヒソヒソ）」

「まあまあ、その辺にしときましょうよ（ヒソヒソ）」

「そうですよ。話が進みません（ヒソヒソ）」

「…まあ、それもそうですわね。それであのお方がどうしてあのようなくっさい台詞を言えるのかと言う事ですが…（ヒソヒソ）」

「私もあんな一面があるなんて初めて知ったわ（ヒソヒソ）」

「あれ、絶対なんの事だか分かってませんよね（ヒソヒソ）」

「きっと上条さんは回りから鈍感って言われてるに違いありません（ヒソヒソ）」

「もしかしたら、もう手遅れになってる子がいるんじゃない？（ヒソヒソ）」

「「「あ～……」」」

…なんか言ってるがきっと男には聞かれたく無い事なんだろうな。
気にしない事にしよう。

友は友を呼ぶ。別に呼ばなくてもいい（後書き）

次回続きになります。

ストックが作れませんでした。

あと明日から学校が始まってしまうので更新が余計に遅くなってしまうかもしれません。

それでも近いうちに投稿できる様頑張りたいと思います。

今後もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9247z/

俺が理想の主人公 -魔術と科学編-

2012年1月9日02時45分発行